



兵庫県立美術館研究紀要

Bulletin of the Hyogo Prefectural Museum of Art

No.10



兵庫県立美術館研究紀要

Bulletin of the Hyogo Prefectural Museum of Art

No.10—2016

目次

Contents

記録と表現再論

出原 均 ————— 4

Re-examining Documentation and Artistic Expression

DEHARA Hitoshi

「靱ギャラリー」について—櫻井弘子氏インタビュー

江上 ゆか ————— 18

Utsubo Gallery: Interview with Sakurai Hiroko

EGAMI Yuka

金山平三の金山らく宛書簡（1）

西田 桐子・相良 周作 ————— 32

Kanayama Heizo's Letters to His Wife Raku (1)

NISHIDA Kiriko and SAGARA Shusaku

英文要旨 ————— 51

Abstracts



図4 高増径草〈水主町より広島市役所方面を望む〉1945年 広島平和記念資料館蔵

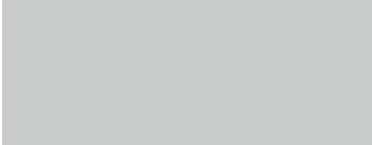


図5 石井草人《広島原子廃虚画》中、〈元広島第一県女跡の一角〉1952-54年 広島市中央図書館蔵

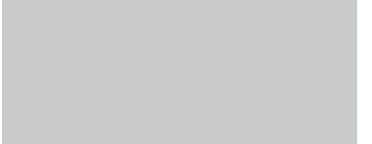


図6 福田政彦《屋上》1945年 広島平和記念資料館蔵



（7）金田晋（監修）、高石勝、出原均、八田典子『戦後広島美術年譜Ⅰ 1945-1950』（『'84美術ひろしま』広島市文化振興事業団 1984年 185-200頁）、金田晋（監修）、雨野忍、高石勝、出原均、八田典子『戦後広島美術年譜Ⅱ 1951-1955』（『'85美術ひろしま』広島市文化振興事業団 1985年 131-150頁）から該当記事を拾った。ただし、「平和美術展」の記事のみ「海渡る平和美術展の一作品」（『中国新聞』1948年8月12日 2頁 図版あり）による。

（8）大木茂「原爆ドームと周辺」（『中国新聞』1953年8月31日（夕刊）3頁。「原爆被災資料総目録 第一集」でも、次のように述べている。「壁の殆んどは、元県産業奨励館の壁を主題に描いたもので、記録にもなるが、芸術至上主義で、私の好みで写生したものです。醜の美とはちょっと違ふが、原爆で焼けただれた壁は構図に変化があり、灰色調な不透明色感^は渋味を感じ又ボリュームを感じる。じっと壁に向っていたら原爆の厳しさや平和でなくてはならないいろいろなことを感じさせて、各壁を連作した。」

（9）出原均「記録と表現－1960年代までの作品について－」（『ヒロシマ以後 現代美術からのメッセージ』展図録（広島市現代美術館 1995年） 19頁

（10）たとえば、広島市原爆体験刊行会（編）『原爆体験記』（1975年 朝日新聞社）中の堤実三の体験記 222頁。

（11）加藤龍明「主人なきアトリエ 画家たちの戦争体験 7」（『中日新聞』1986年8月19日 5頁

を残している。

そのいくつかは展覧会の記録で辿ることも可能である。1952（昭和27）年頃までの記録を列挙すると⁽⁷⁾、

1946（昭和21）年10月	石井草人個展で災害記念画20点などが展示される。
1948（昭和23）年2月	木谷徳三個展で《原爆の跡》などが展示される。
8月	「平和美術展」で森元国夫の《廃墟に祈る》（図7）が出品される。
1949（昭和24）年4月	福井芳郎個展で《ひろしま》などが展示される。
1950（昭和25）年7月	小川緑個展で広島、長崎を描いた作品が約40点展示される。
※小川は、長崎出身の画家（1906－88）。	
1951（昭和26）年3月	柳沢文雄個展で《廃墟》が展示される。
※柳沢は、医者の日曜画家の集まりである杏林会の会員。	
1952（昭和27）年9月	土居晩鐘個展で原爆作品約50点が展示される。
※土井晩鐘はアマチュア画家で、1962年頃死去。	

これらすべてが廃墟の風景画とはいえないまでも、多くはそうだと思われる。原爆を題材にした絵の中ではこの種のものが最も多いのは間違いない。風景画は最もポピュラーで、描きやすいジャンルであり（無論、この頃、広島で描かれた風景画全体の中では、廃墟を描いたものは少なかつただろうが）、また、もともと西洋で歴史のある廃墟画は、日本でも関東大震災後などに描かれたこともあって、受け入れ易かつただろう。

廃墟に対する思いは画家や観客によって異なる。古典的な態度をとるのは、大木茂（1899－1979 庚午北で被爆）である。産業奨励館の焼け爛れた壁を連作に描いた大木は、そこに美を感じたことを理由にしている（図8）⁽⁸⁾。廃墟美が認知されているからこそ成り立つ発言である。

廃墟は、空爆によって多くの都市が灰燼に帰した日本ではありふれた光景であり、それでもって被爆という未曾有の出来事を表したとはいいいがたい。ただ、福井芳郎が描いた《廃墟》（1947年 図9）や《ヒロシマ（現、ヒロシマ原爆）》（1948年 図10）は、地平線を画面の上方に置き、視線が止まりやすい建物よりも、瓦礫の散乱した焼け野原が延々続く光景に焦点を当てており、その広がりと空虚さの徹底において、被爆した広島の風景画足りえているかもしれない⁽⁹⁾。被爆体験記において、市内は見渡すかぎり焼け野原で、遠くの山や島がすぐ目の前にあるように見えたと語られてきたこととも合致する⁽¹⁰⁾。なお、福井の《ヒロシマ》の光景には、いたるところ煙が立ち上っているので、被爆直後を描いた記録画と見なすことができる。

2 きのご雲

名古屋出身の洋画家、眞島建三（1916－94）が1945（昭和20）年に描いた《遍歴》（図11）には奇妙な形の雲がある。これはきのご雲を表しているのかもしれない。広島が被爆した日、呉で従軍中の眞島は、そこから実際のきのご雲を見たようである⁽¹¹⁾。描かれた雲は、その下部が地上から離れており、発生したきのご雲がやがて小さくなっていくときのものに似ている。

きのご雲は、被爆の惨状を直接見せるわけではないからか、占領軍のプレスコードが原爆報道を規制する中にあっても、その写真が公開されており、その独特の形ゆえに原爆の換喩、象徴となった。広島・長崎以外の画家が原爆を題材にした絵、たとえば、古沢岩美（1912－2000）の《憑曲》（1948年2月の第1回モダンアート・クラブ出品作 図12）や山本敬輔（1911－63）の《ヒロシマ（人）（現、ヒロシマ）》（1948年9月の第33回二科展に《ヒロシマ（雲）》、《ヒロシマ（空）》とともに出品 図13）などにこの雲が登場する。これらの絵では、後述するように、きのご雲の存在によって被爆であることが分かるような仕組みになっている。前者のきのご雲は、その特徴的な形からして、1946（昭和21）年のビキニ環礁の核実験で発生したものが元のようである。未来空想風の絵には、広島・長崎よりも新しく、より強力な原爆で生じたきのご雲がふさわしいと作者は考えたのだろうか。

被爆を象徴するきのご雲は、その禍々しい形が原爆の恐怖を惹起させる。その一方で、きのご雲を見るということは、その人が爆心地からある程度離れていることも明らかにする。きのご雲直下の被爆者は、その上空に発生した雲がどのようなものだったか知りえなかつただろう。確かに盛り上がる雲が見える距離でも被爆した人はいたし、きのご雲を見てから入市し、二次被爆した人もいたので、きのご雲を描く側が即安全圏であると捉えるべきではない。ただ、あくまでも視線の対象にすぎないきのご雲と、生々しい被爆体験との間には著しい乖離があるとの認識は欠かせないだろう。その認識があるからこそ、《原爆の凶》を描いた丸木位里・俊夫妻が、広島での展示に際して、次のように発言したのだと思われる。

映画でも絵画でも雲がモクモクと出ているのが原爆であるというような軽々しいあつかいをしているのが気に入りません ⁽¹²⁾ 。	

丸木位里・俊夫妻「原爆の凶」1948年 広島平和記念資料館蔵

なお、本論の冒頭にあげた『月刊中国』の表紙には、きのご雲が広島市全体を覆う俯瞰図が描かれているが、この絵にサインは記されていない。目次には他の挿絵を描いた広島の画家の名が記されているが、この絵のみ空欄になっている。ただ、そこでは表紙絵と目次頁の絵の項目が並記されているので、この絵も吉岡一が描いた可能性が考えられるかもしれない。

3 被爆者

（1）《原爆の凶》以前－広島以外
上で述べた山本敬輔の《ヒロシマ（人）》と古沢岩美の《憑曲》を再度取り上げよう。山本の《ヒロシマ（人）》にはピカソの《ゲルニカ》のスタイルが採用されている。未曾有の出来事を表すには、こうした前衛的な表現がふさわしいとの判断だろうか。現実の世界とは独立した絵画世界を構築しつつ、絵画内の暴力性によって現実の暴力性を暗示させる方法である。山本は、以後何年間かこのスタイルで戦争などの主題を描いた。《ヒロシマ（人）》の中の被爆者についていえば、顔に黒く太い線が施されており、それが火傷ないしケロイドをいくらか髣髴させる。

一方、古沢の《憑曲》が描く被爆者は、超現実主義風である。科学小説の挿絵に出てくるような奇怪な姿であり、巧みな描写力によって写實的に描かれているが、実際の被爆者とは似て非なるものである。古沢は被爆者の実態を知らなかつたのかもしれない。

両作品とも、遠景にきのご雲を配し、近景に異様な人物を描く構成で共通する。



図7 森元国夫《廃墟に祈る》1948年

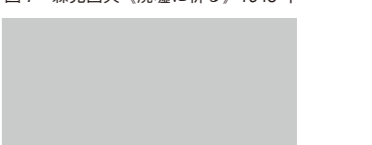


図8 大木茂《壁C・ドームの中》1948年 広島県立美術館蔵



図9 福井芳郎《廃墟》1947年 広島平和記念資料館蔵

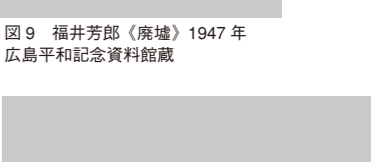
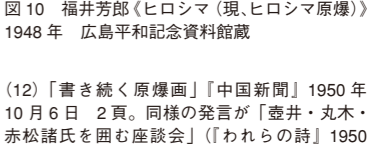


図10 福井芳郎《ヒロシマ（現、ヒロシマ原爆）》1948年 広島平和記念資料館蔵



（12）「書き続く原爆画」（『中国新聞』1950年10月6日 2頁。同様の発言が「壺井・丸木・赤松諸氏を囲む座談会」（『われらの詩』1950年12月 第10号 31-32頁）にあるので、以下に引用する。「原爆といえ^ば雲がむくむくできているとか、焼跡だとか、「長崎の鐘」でもお祈りするだけだ。それより人間が死んだということがつらいし、癪にさわるとい^う気持ちがあって、どうしても人間のみを描きたいとおもった。」

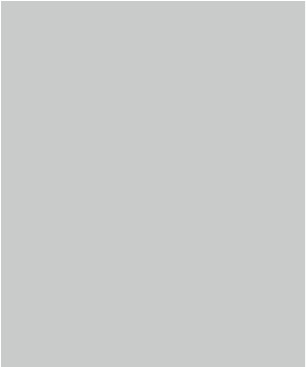


図 11 眞島建三《遍歴》1945年 個人蔵（名古屋市美術館寄託）

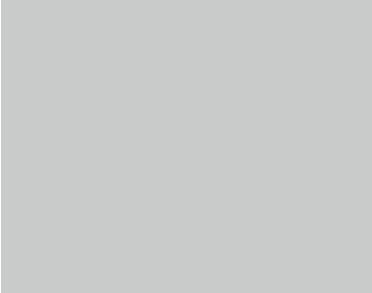


図 12 古沢岩美《夜曲》1948年 板橋区立美術館蔵

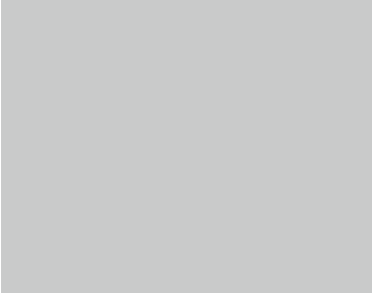


図 13 山本敬輔《ヒロシマ（人）（現、ヒロシマ）》1948年 兵庫県立美術館蔵



図 14 福沢一郎、大田洋子作「屍の街」表紙絵 1948年

(13)「海渡る悲願の“原爆図” 米国で特別陳列 シュ博士が持帰る」『中国新聞』1950年8月6日 3頁（図版あり）

(14) 新延の画文集『日時計』（中国新聞社 1991年）中の「原爆と絵画」（121-122頁）では、「二、三作目はあとで破った」とある。なお、原爆を主題とした絵画については、『続・日時計』（中国新聞社 1997年）中、「セピア色の残映」（52-54頁）で次のように述べている。「昭和二十三年から三年つづけて原爆被災をテーマに日展に出品した。しかし、リアルな再現は、惨状を想起させて息苦しくなり、象徴化し、抽象化する方向は、逃げに思え、嫌いになって、原爆画を描くことを断念した。」

その人物が被爆者だと認識できるのは、題名は別にして、遠景にきのご雲があるからである。逆にいえば、被爆者だと認識させる上で、きのご雲は欠かせなかったのである。これらは、占領下の検閲によって被爆者の実態が隠されていたからこそ作られた表現といえるかもしれない。両方とも、前衛的なスタイルによって過剰に恐怖を喚起させるが、被爆独特の恐怖には必ずしもつながることはなく、やや空回りするのは否めない。

大田洋子の原爆小説『屍の街』（1948年）の表紙として福沢一郎（1898－1992）が描いた絵（図 14）は、とくにスタイルに特徴があるわけではなく、簡潔な線で人物が描かれている。表紙の上半分にある抽象的な模様は、きのご雲を表しているのだろう。下半分にいる裸体の人々は、したがって、被爆者である（この点、山本や古沢の絵ほどあからさまではないが、それらと同様の関係性の構造がある）。倒れ、もだえ苦しむ彼らの髪は逆立っており、『中国新聞』の写真家、松重美人が被爆当日に撮った被爆者の姿に似ていなくもない。福沢は、『屍の街』が出版される半年前の同年4月、「第2回現代美術総合展」に、裸体が山積みになった《敗戦群像》を出品している。裸体群像は、もともと人間の原像として福沢が1930年代から描いてきたモチーフだが、敗戦によってすべてを失い、文字通り裸一貫で再出発した戦後の日本人の姿にも合致した。あるいは、時代が画家に近づき、時代が新しい意味を付与したというべきかもしれない。いずれにせよ、福沢のこの小さな表紙絵は、被爆者に焦点を当てた点で丸木位里・俊夫妻の《原爆の図》の原型であるとともに、《敗戦群像》とのつながりから、戦後の日本人の原像でもある。さらにいえば、丸木夫妻の《原爆の図》の被爆者は戦後日本人の原像足りうることを図らずも予告しているようにも思われる。

（2）《原爆の図》以前ー広島

廃墟のところで触れた石井草人は、『原爆被災資料総目録 第一集』によると、被爆の翌年に被爆者も描いていた。《地御前神社の被爆者》と《観光道路の被爆者》の2点である。これらは、同年の石井の個展に災害記念画として出品されたかもしれない。

広島の画家、新延輝雄（1922－2012 本人は疎開で被爆を免れるが、両親は被爆により死去）も第4回日展に被爆者を描いた《たそがれ》（1948年 図 15）を出品している。前述の『月刊中国』8月号に、新延は廃墟の挿絵を載せていた。また、《たそがれ》が日展に入選する数ヶ月前、広島のグループ展でこれと同名の作品を発表しており、両者にはなんらかの関連があることが考えられる。これらからすれば、新延は早い段階で被爆ないし被爆者を描く意志があったのかもしれない。《たそがれ》は、1950（昭和25）年にアメリカでの展示のために海を渡るが、その後、所在不明となる⁽¹³⁾。残された図版によると、被爆当日の夕方の光景らしく、遠景に産業奨励館などの廃墟が、中景にさまよう被爆者が、前景に被爆した両親と子供が見える。瀕死なのか、母親は父親のひざに頭を置いて横たわり、子供は父親の背後にいてその肩に手を掛けている。被爆下での家族愛を描いたのだろう。新延はその後連続して《ヒロシマ》（1949年）、《朝の憂愁（ヒロシマ）》（1950年）を日展に出品しているが、後、自ら破棄したため（1969（昭和44）年刊行の『原爆被災資料総目録 第一集』の段階ではあったようである）、どのような内容だったのか明らかでない⁽¹⁴⁾。

なお、被爆画家、増田勉（1916－2007 比治山橋付近で被爆）は、山本敬輔が《ヒロシマ（人）》を出品したのと同じ二科展に、翌年の1949（昭和24）年、《夜曲

（現、母子）》（図 16）を出品したが、山本同様、母子をキュビズム風のスタイルで描き、しかも、きのご雲ではなく、球体から発する閃光を加えているだけなので、被爆者であることは必ずしも明白ではない。その意味で、この絵は、被爆や被爆者を描くことの難しさを露呈しているように思われる。

このように、広島にも被爆者を描く画家がいたが、いかに描くかについては試行錯誤の状態であった。

（3）丸木位里・俊《原爆の図》第1部～第3部

廃墟を描くことができても、その視線を被爆者そのものに向けて対象化することは、広島在住の画家には容易でなかった。被爆の地で発表する理由もほとんどなかっただろう。制作と発表ができたのは、広島とその外との境界に属する画家であり、丸木位里・俊夫妻はまさにこの立場にあった。広島出身の日本画家、位里は、被爆直後の広島の惨状を目撃し、親族や、のちに父親を原爆で亡くしていた。夫人の洋画家、俊も位里の後に入市し、二次被爆している。両人は関東を拠点に活動し、共産党に入党していた（共産党は、当初、占領軍を解放軍と見なしていたが、1948（昭和23）年頃から占領軍と左翼との対立が徐々に深まり、たとえば、左翼系の出版物に被爆の写真に掲載するなど、プレスコード違反を繰り返していた⁽¹⁵⁾）。無論、これらは条件でしかなく、最終的には夫妻の強靱な意志が可能にしたわけである。

被爆者を真正面から描き、国内外での巡回展示でその惨状を広く伝えた《原爆の図》全15部については、これまで様々な角度から論じられてきた。小沢節子氏の『「原爆の図」 描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』（2002年）は、その時点で最も総括的に論じており、現在もそれは変わらないので、詳細は同書に譲る。ここでは、とくに絵画としての内容と表現の関係について述べたい。

第1部の《幽霊（当初の題は、八月六日）》（1950年 図 17）は、幽霊のように手を前に差し出した被爆者の姿を視覚化している。占領期の検閲文書を保管するアメリカのプラウゲ文庫を調査した堀場清子氏が、事後検閲に違反した例として、被爆者を幽霊に喩えた1947（昭和22）年の文献をあげていたが⁽¹⁶⁾、おそらく、幽霊の喩えは広島である程度流布していたと思われる。しかし、その姿を視覚化して広めたのはこの絵であろう。

こうした被爆者の姿を描き出す一方、静と動、黒と白の対比など、絵画として高い表現力も備えている。左上から右下にS字形に流れるような構図は、位里が前年に描いた《群牛》（図 18）を左右逆にしたものであることをかつて指摘したことがある⁽¹⁷⁾。位里自身も《群牛》と《幽霊》との関係を認めている⁽¹⁸⁾。1948（昭和23）年頃から被爆者の絵を描く決意をし、人体デッサンを始めた夫妻だが、今日あるような《原爆の図》に本格的に取り組んだのは、《群牛》が制作された1949（昭和24）年以降と考えてよいだろう。

被爆者の群像には、西洋の群像表現に通じるところも見られる。ただ、一点透視法の空間ではなく、東洋的な余白の空間なので、人物の配置はかなり自由である。とくに人物を背後に重ねていく際、前の人物よりも画面の上に配置するが、もし一点透視法の空間でこうした配置を行うならば、視点をかなり高く取る必要があり、その場合でも、人物そのものは概ね水平方向から見えるように描かれるので、水平方向の人物と、見下ろした空間全体とで齟齬が生じない程度にとどめざるをえない。やはり、融通無碍な余白の空間のほうが配置の自由度は高いといえよう。だからこそ、上述したように、左上から右下への対角線構図に群像を収めること



図 15 新延輝雄《たそがれ》1948年



図 16 増田勉《夜曲（現、母子）》1949年 広島県教職員組合蔵

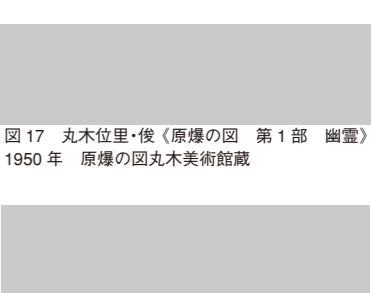


図 17 丸木位里・俊《原爆の図 第1部 幽霊》1950年 原爆の図丸木美術館蔵



図 18 丸木位里《群牛》1949年

(15) モニカ・プラウ（著）、立花誠逸（訳）『検閲 1945-1949 一禁じられた原爆報道ー』（時事通信社 1988年）によれば、「一九四九年二月には、Gー2、CIE、法務局、およびCCDの代表が参加して合同会議が開かれ、プレスコード違反が討議された。（中略）違反行為のほとんどは、「たいてい左翼ないし共産主義の傾向をもつ」、発行部数が少ない新聞におこっていたことが注目された。」(122頁)。山本武利『占領期メディア分析』（法政大学出版局 1996年）の第2部第三章「左翼メディアの弾圧」は、「アカハタ」をはじめとする左翼系メディアの弾圧を詳述している。

(16) 堀場清子『原爆 表現と検閲 日本人はどう対応したか』朝日新聞社（朝日選書）1995年 148頁

(17) 出原前掲『記録と表現ー1960年代までの作品についてー』19頁

(18) 丸木位里・丸木俊・長岡弘芳「紹介 13部の完成によせて 丸木夫妻に聞く『原爆の図』を描きつづける」『市民』1971年9月 第4号 108-114頁（長岡弘芳『原爆文学史』（風媒社 1973年 222頁）に再録）

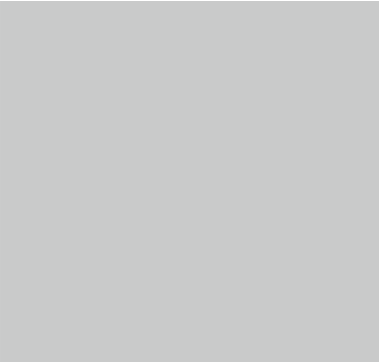


図19 丸木位里・俊《原爆の図 夜》1950年 個人蔵



図20 丸木位里・俊《原爆の図 第2部 火》1950年 原爆の図丸木美術館蔵



図21 丸木位里・俊《原爆の図 第3部 水》1950年 原爆の図丸木美術館蔵

も可能だったのである。

群像はいくつかの塊に分かれるが、それらがすべて対等かといえば、必ずしもそうではない。四曲一双（発表当時は仮張り。その後、巡回を考慮して軸装となり、世界巡回の際に屏風に改装された）の横長画面であり、観客の視線を止めるために焦点が設けられた（この点は《群牛》と異なる）。焦点は顔を見合わせる姉妹である。大田洋子の『屍の街』にも、大田と彼女の妹が互いを見、相手の顔から自分の顔がどうなっているか類推する場面があるが、それによく似ている。二人を画面の中心より右にずらしているのは、日本の非対称の美意識に由来するというよりも、もともと一双の屏風として構想したから、姉妹の間合いを右隻、左隻に分断してしまう中心軸を避けたからだと考えられる。

このように、被爆を描いた《幽霊》は、被爆の特徴的な物語を視覚化すると同時に、構図や人物配置、焦点など、絵画としての構成にも重きを置いている。

《幽霊》の次に取り掛かった《夜》(図19)は未完に終わった。8月6日の日中の幽霊を描いた1作目に対し、2作目で描こうとしたのは、その日の夜に眠ることもできず、闇の中で蠢く生者である。両作の内容上の対比は構成にも窺える。俊によれば⁽¹⁹⁾、《幽霊》は、画面向かって左から描き始めたそうだが、《夜》は、現存分が示すように、逆の方向から描かれた。人物の流れも右から左へと進む。描写についても、俊による精緻な《幽霊》と異なり、やや荒い描き方である。位里の筆が入っているのかもしれない。この描き方と人物の流れは、第2部として完成された《火》(図20)に踏襲されている。しかも、《火》では焦点となる、倒壊家屋から人を助け出す場面が、《幽霊》とは逆に右隻にある点まで視野に入ると、それをそのまま逆照射して、《夜》も同様の位置に焦点を設けようとしていた可能性が考えられる。このように内容と形式の両方から検討すると、《幽霊》と《夜》は対として構想されたものであることが理解される。さらに、幽霊のような被爆者の姿と、夜中に竹やぶで蠢めく人々は、位里が広島の両親宅に着くまでに見た光景だった⁽²⁰⁾。《幽霊》と《夜》は、位里の体験に基づく点でも、まとまりがあるといえよう。

《幽霊》と《夜》を対とする構想が途中で断念されたのだとしたら、どのような理由があったのだろうか。俊によれば⁽²¹⁾、《夜》の制作途中で売り絵を描いたため、再開してももはや前のように描けなくなったからだという。精力を傾けた制作ゆえに、中断が制作態度に大きく影響したことはありうるが、《夜》の主題を破棄する理由にはならない。《夜》とは逆に、《火》は、《幽霊》よりも被爆の瞬間に遡るから、被爆の迫真性、体験の生々しさを捉えようとする強い意志が感じられる。《夜》の一部が発表された1950年3月から《火》発表の8月までに、おそらく小沢氏が述べるように⁽²²⁾、山端庸介が長崎で被爆翌日に撮った写真などを夫妻が入手したことが考えられる。

被爆の主題を深めることで2部作から3部作への変更が生じたが、《幽霊》の基本形を踏まえて次作に進んだ点是不変らない。第2部《火》と第3部《水》(図21)は、《幽霊》で描いた、人間の原像ともいべき裸体群像に、ほとんど火と水を加えただけで成立している。この3作は、いずれもいくつかの群像を配置し、中心近くに焦点を置く構成で共通する（中心性は、後の《原爆の図》では必ずしも自明のものではない）。こうした共通性の枠の中で、いくつか差異を設けている。《夜》を継承した《火》は、《幽霊》と違って右隻に焦点が当てられる。《水》も、右隻にある、死んだ赤子を抱く母親の姿に焦点がある。その《水》と《火》はいくつかの点で対称的である。画面が炎で満たされた《火》に対し、《水》は余白の多い

画面。《幽霊》が静と動を併せ持つとすれば、群像の動作が激しい《火》は動的であり、《水》は、右隻の群像と、左隻を占める、福沢一郎の《敗戦群像》のような死者の山によって全体が逆三角形を構成し、静的である。内容の時間系列は、《火》→《幽霊》→《水》の順。このように、《夜》を断念した夫妻は、《幽霊》と《火》《水》を時間軸の中でつなげ、画面構成などで共通性と差異に配慮しつつ、3作でまとまりのあるものに仕立てたのである。

（4）福井芳郎《原爆記録画》

既述の福井芳郎は、日本が独立した1952（昭和27）年の8月、広島の福屋百貨店の催事場で《原爆記録画》の中間報告展を開催し、《炸裂後15分》(図22)《学徒》《その翌朝》の大作3点を発表した。さらに、その一年後、東京の白木屋で「ノー・モア・ヒロシマズ広島原爆絵画展」と題して、前作に《幼子》(図23)《驟雨》《難民》《爆発後》を加えた7点及びスケッチ20点からなる展覧会を開いた（翌年4月に広島でも実施）。

太平洋地域のアメリカ軍総司令部が発行していた新聞『Pacific Stars & Stripes』の1952年7月7日号には、フレッド・サイトウ記者による福井のインタビュー記事が掲載されている⁽²³⁾。福井は、自分の絵は共産党の画家のものとは違うという。瀬木慎一氏も指摘するように⁽²⁴⁾、この共産党の画家は丸木夫妻と思われる。画家を単数形にし、前日の7月6日の記事では、その絵が広島で公開された年を一年違えていることから⁽²⁵⁾、記者は丸木夫妻について不明で、福井の話をそのまま記しただけだろう。誤記は通訳の過程で生じたのではないか。福井は、丸木夫妻の絵が醜悪であり、自身の絵では一種の美を追求したいと語るが、被爆に美を見出す説明はアメリカ人に配慮した可能性が高い。それでも、この記事から福井は丸木夫妻を強く意識していたことが窺える。

福井はこれまで広島の廃墟を描き、被爆した広島、いわゆるヒロシマを表現したという自負があっただろう。しかし、被爆者を描いてこそヒロシマを表現しうることを丸木夫妻が《原爆の図》によって示したため、その自負は揺らいだかもしれない。その一方で、被爆を体験した者としては、そうではない夫妻の《原爆の図》に納得できなかっただろう。被爆の実相は体験した自分が描かなければならないという使命感が、《原爆記録画》に向かわせたといえよう。

福井の《原爆記録画》と丸木夫妻の《原爆の図》を比較しておく。

- 《原爆の図》は水墨を基調とする日本画だが、《原爆記録画》は色彩豊かな洋画である。
- 《原爆の図》各作の象徴的な題名と違って、《原爆記録画》は説明的、即物的である。
- 《原爆の図》の各作はすべて同じサイズだが、《原爆記録画》は、内容に合わせてサイズを変えている。
- 《原爆の図》ではほとんど被爆者のみが描かれているのに対し、《原爆記録画》では周囲の状況とともに描かれている。

以上から、《原爆記録画》の特徴を抽出しよう。《原爆の図》が、夾雑物を除き、被爆者に焦点を当てながら、あるいは、だからこそ、絵画としての質を堅持しているのに対し、《原爆記録画》は、題名どおり、いくつかの点では絵画の質を度外視してでも、記録性を重視したことは明らかである。それは、とくに構図に現れている。《炸裂後15分》と《その翌朝》は、対のような作品だが、横長の画面にそのまま水平の空間を拡げ、奥への展開もスムーズである。そこに点在する被爆

これ以外にも、山端の写真が利用されている。「ピカドン」の「ーしゅん、静かなこと水をうったよう。・・・」の絵は、山王神社の鳥居を撮った山端の写真が元である。また、広島の写真家、川原四儀の「紙屋町西練兵場から八丁堀方向を望む」(『広島壊滅のとき 被爆カメラマン写真集』広島原爆被災撮影者の会 1981年 川原四儀20)も、「爆心地の話をつたえてくれる人は誰もいません。」の絵の元になっている(図C・D)。

この点で興味深いのは、『NO MORE HIROSHIMA’S 広島を忘れるな』(自由青年出版社 1950年8月1日)である。前掲の「ヒロシマの史点 占領下の原爆文献考」第15回(『中国新聞』1986年7月22日 10頁)によると、この本は1950年の平和大会の関連で企画されたが、レッドバージが吹き荒れる状況下、「奥付にある出版社は現存せず、編者も含め架空だった可能性が強い」という。「平和戦線」と同様、松重美人による広島の被爆当日の写真や、広島のものとして誤って記された山端の写真のほか、丸木夫妻の《幽霊》の図版が掲載されたり、1頁には川原自身の別の写真「山口町廻りから上流川、元NHK放送局を望む。」(『広島壊滅のとき 被爆カメラマン写真集』川原四儀21)が掲載されたりしている。ここから、左翼の側でどの程度こうした資料が集められていたかが理解されよう。



図C 丸木位里・俊「爆心地の話をつたえてくれる人は、誰もいません。」「ピカドン」1950年



図D 川原四儀「紙屋町西練兵場から八丁堀方向を望む。…」

 (23) Fred Saito, ‘Artist Portrays Hiroshima Blast,’ *Pacific Stars & Stripes*, July 7, 1952, p.6

(24) 瀬木慎一「戦後50年美術界の明暗 12 「星条旗」に見る日本の美術 8」『美術の窓』1996年5月 第15巻第4号(通巻第156号) 76-82頁(『日本の前衛1945-1999』生活の友社 2000年に再録 97-98頁)。ただ、瀬木氏は福井芳郎について全く知見がなく、「完成次第、東京で発表する予定とあるが、果たして実現したかどうかは分らない。」「それにしても、この画家がどんな風に描いたのかが分からないのでは、論評の仕様がない。」と述べる。

 (25) Fred Saito, ‘Hiroshima Recovering From A-Bombing,’ *Pacific Stars & Stripes*, July 6, 1952, p.6.



図22 福井芳郎《炸裂後 15分》1952年 広島平和記念資料館蔵



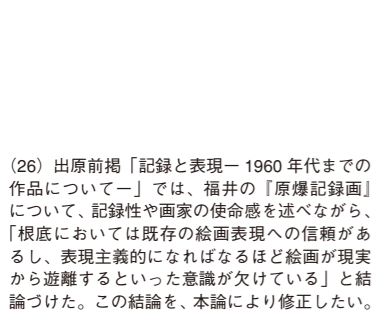
図23 福井芳郎《幼子》1953年 広島平和記念資料館蔵



図24-1 イサム・ノグチ、平和大橋欄干デザイン 1951年



図24-2 イサム・ノグチ、西平和大橋欄干デザイン 1951年



(26) 出原昌代『イサム・ノグチー宿命の越境者（下）』（講談社 2000年 60頁）によると、当初、「イキル」であったが、映画「生きる」と被らないように「ツクル」にしたという。吉田三郎「廣島の平和大橋勾干と慰霊碑の設計不採用問題について」（『建築と社会』1952年6月 第33巻第6号 5-9頁）には、橋の名称に触れた1951年9月18日付け広島市長宛イサム・ノグチ書簡が引用されている。

(28) 出原均「広島都市像ー（まち）を展示するー（2002年6月11日ー7月14日）特集」『THE ARCH 広島市現代美術館ニュース』2003年3月 第25号 4-7頁

(29) 『ノグチ』美術出版社 1953年 図版71と図版72

者の中で中央の人物をやや大きく描く構成は、とりたてて技巧を凝らしているようには見えない。翌年に制作された《幼子》《難民》は、やや俯瞰した空間に様々な姿を配したもので、とくに焦点となるものもない。福井は、構図や構成で作為することはかえって被爆のリアリティを妨げると判断したのではないか。

福井の描く被爆者の多くは、閃光火傷を負って膨れ上がり、その髪は逆立ち、襤褸をまとうなど、実際にその状況を目撃した者だからこそ描きうる生々しさがある。しかし、その一方、手足を曲げた赤ん坊のような姿が繰り返され、描写にデフォルメや誇張があり、ある種のプリミティブさも感じられる。それゆえ、福井の《原爆記録画》は、後に広島市民が描いた「原爆の絵」に通じるものがあるように思われる。しかし、市民の「原爆の絵」では、私たちはその稚拙さを稚拙さとして認識し、それを括弧に入れて被爆の実態を想像しようとする（その際、添付された説明文が役に立つ）。それに対し、福井の《原爆記録画》は、やはり、絵画として見るものである。プリミティブさを篩い落として実態を想像するのではなく、両者が渾然一体となった絵として捉える。つまり、プリミティブさは彼の表現意図と考えられる。丸木夫妻のような計算された表現ではないが、やはり、これもひとつの表現であろう。どこかピカソからの影が届いているのかもしれない。彼の描く被爆者は滑稽に見えるが、それは、むしろ福井の確信犯的な意図であって、彼は、人間がそこまで落とされたことを強く訴えようとしているのではないか。前述のインタビューのような美を求めたのではなく、怒りを込めたというべきではないか^[26]。

4 記録画を超えて

(1) イサム・ノグチのデザイン

1950年来日した彫刻家、イサム・ノグチ（1904－88）は、平和公園施設の構想を実現へと進めていた丹下健三と出会い、翌年、まず、平和大橋・西平和大橋欄干のデザイン、次に慰霊碑のデザインを行った。それらのデザインについて検討したい。

平和公園への東西からのいわば参道にあたる平和大橋・西平和大橋の欄干デザイン（図24）は、ノグチ自身が提案した名称である「イキル」と「ユク」が示すように^[27]、「生」と「死」を象徴的に表すものであった（「ユク」には、「逝く」と「行く」の意味があり、「イキル」が後に「ツクル」に変更されたので、それとの対称性もなくなり、公的な説明では「死」はあからさまでなくなったが）。平和大橋の欄干は、マッスがあって彫刻的であり、斜めに上昇する四つの先端には球体を半分に割ったものが取り付けられている。これは太陽を象り、生命を象徴する。西平和大橋の形には、エジプト神話などに登場する、魂を死者の国に運ぶ船の形が参照されているという。私は、この「死」の象徴については、西平和大橋の中にもうひとつあると考えている^[28]。それは、平和大橋と対照的に、四つの欄干の先を外側に曲げつつ、下降させて大地に沈めているところである。文字どおり「大地に帰る」である。

平和大橋・西平和大橋を一直線に結ぶ平和大通りを底辺とするなら、その三角形の頂点に位置するのが平和公園内の慰霊碑である。ノグチは、両橋のデザインで別々に扱った「生」と「死」を、そのデザインでひとつに統合する意図を持っていたと思われる。作品集『ノグチ』に掲載された写真が示すとおり（図25）^[29]、慰霊碑は地上部と地下部からなる。地上部分は、ボリュームのあるアーチで、そ

の二本の足が地下の空間では柱のように伸びる。地下空間は、死者の住む空間だが、そこにある柱が伸びて、地上に突き出すわけで、これは生命力を表している。ノグチは地下空間を「子宮」と見なす^[30]。つまり、「死」はただ「死」ではなく、「生」のための「死」なのである。

このように見ていくと、ノグチの抽象的な造形言語による象徴表現は、コメントとして当然といえば当然ながら、絵画が求めてきた原爆の記録性とは異なる方向を示している。ノグチは世界中の遺跡を調査し、民族の違いを超えた普遍的な形について思索し、それを、原爆を主題にした作品の中で実現しようとした。地下空間の「生」と「死」といえば、栗原貞子の有名な詩「生ましめんかな」が想起されよう。地下の部屋で、被爆により瀕死の産婆が赤ん坊を母親から取り出す場面を詠った詩である。美術と文学のジャンルの違いとはいえ、栗原の詩は、あくまでも実話に基づく具体的、物語的な「生」と「死」である。それに対し、ノグチは、地下の空間そのものを「生」と「死」の場に転化しようとしたのであり、それを抽象的な形によって象徴的に試みたのである。

これらの象徴は当時、一般にどれだけその意味が理解されていたかはわからない。なによりも、アメリカ人であるノグチによる慰霊碑のデザイン案は、それを審議する委員会によって却下され、丹下案に席を譲った。彼のデザイン案については、雑誌や作品集などに掲載されたのを見るしかなかった。ここでは経緯についてこれ以上触れない。むしろ、確認したいのは、彼のデザイン案は、孤立したものではなく、原爆をめぐる新しい表現の中のひとつだということである。原爆を主題とする表現は、記録重視の作品が制作された頃からすでに次の展開が模索されていたのである。

(2) 《原爆の図》第4部以降

丸木夫妻が続行した連作《原爆の図》においても、記録的な描写からの転換が窺える。これは、《原爆の図》がもともと高い絵画的な質を保持していたこととは別の問題だろう。

第4部《虹》(1951年 図26)と第5部《少年少女》(1951年 図27)は、前三作でほとんど扱われていなかった被爆者、つまり、在郷軍人、アメリカ人捕虜、傷病者、そして、少年少女を落穂拾いのように掬い上げる。両作とも、前三作のように画面の中心近くに焦点を設けてはいない。画面構成などで新しい展開を考えていたのだろう。

《少年少女》は、俊が子供たちを描いた後で、位里が騒然たる周囲の情景を描いたそうだが^[31]、伏せている人物にとっては本来地面であるところが、火と煙が立ち上がる中空として描かれており、このような人物と空間との齟齬が、絵に緊張感を与えている。すでに《水》でも異時同図法ないし異なる空間の嵌入が行われていたが、《少年少女》の空間の脱臼も意欲的な試みと見なすことができよう。

一方、被爆者の姿は、前三作に比べると普通の人に近い姿になっている。三人の大人はともかく、少年少女には閃光火傷による腫れた様子はなく、被爆の様相を示すのは、わずかにガラスが突き刺さった少女ひとりだけである。俊は、痛々しい描き方ができなかったという^[32]。一様に手を伸ばして倒れるポーズは、いかにもアトリエでモデルを描いた感じが拭えないこともあるが、人物描写は、被爆者の実態に迫ろうとした前三作の立場からやや遊離してきたように感じられる。

この点は、第6部《原子野》(1952年 発表は翌年 図28)や第7部《竹やぶ》(1954年 図29)でより顕著になる。被爆者は俊が絵本に描く人物に似て様式化が進み、写実性が少々抑制される。《竹やぶ》は《夜》に似た光景なので、両者の人物描写



図25 イサム・ノグチ、慰霊碑デザイン 1951年

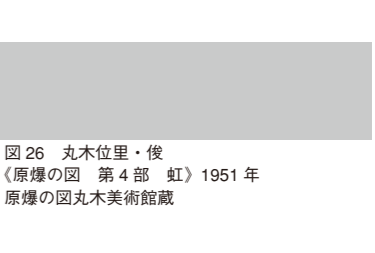


図26 丸木位里・俊《原爆の図 第4部 虹》1951年 原爆の図丸木美術館蔵

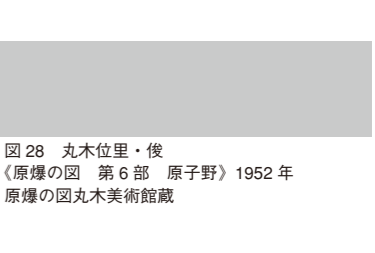


図27 丸木位里・俊《原爆の図 第5部 少年少女》1951年 原爆の図丸木美術館蔵



図28 丸木位里・俊《原爆の図 第6部 原子野》1952年 原爆の図丸木美術館蔵

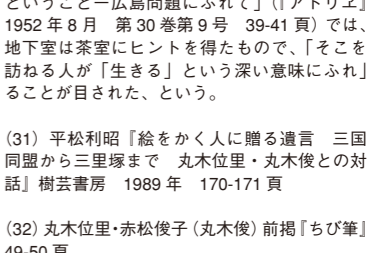


図29 丸木位里・俊《原爆の図 第7部 竹やぶ》1954年 原爆の図丸木美術館蔵

(30) イサム・ノグチ、小倉忠夫（訳）『イサム・ノグチ ある彫刻家の世界』美術出版社 1969年 171頁。なお、イサム・ノグチ「モダンということー広島問題にふれて」（『アトリエ』1952年8月 第30巻第9号 39-41頁）では、地下室は茶室にヒントを得たもので、「そこを訪ねる人が『生きる』という深い意味にふれ」ることが目された、という。

(31) 平松利昭「絵をかく人に贈る遺言 三国同盟から三里塚まで 丸木位里・丸木俊との対話」樹芸書房 1989年 170-171頁

(32) 丸木位里・赤松俊子（丸木俊）前掲「ちび筆」49-50頁

(33) 小沢前掲書 180頁



図 30 山下菊二《オト・オテム》1951年 個人蔵



図 31 福井芳郎《ヒロシマの怒り》1967年 広島平和記念資料館蔵

の違いが如実に看取できよう。小沢氏が《原子野》を象徴的だと述べたのも⁽³³⁾、こうした様式化がひとつの要因ではないだろうか。

《原子野》の左隻に描かれたのは、人骨の山である。これは、1952（昭和 27）年 7 月に安芸郡坂町で発掘された被爆者の人骨の写真から着想を得たと思われる。この出来事は、当時大きく報道された。骨を描くにあって実際には他の資料も参照したかもしれないが、契機となったのはこの出来事だろう。この関連にはどのような意味があるのだろうか。《原子野》は、後述するように、被爆の生々しい写真が一般に公開されてから最初の制作なので、写真の強度に近づくように凄惨さを強調したと考えられるが⁽³⁴⁾、さらに、被爆時ではなく、1952（昭和 27）年における出来事を《原爆の凶》に盛り込んだことも意義深いと思われる。《原爆の凶》が時代と併走するのは、1954（昭和 29）年の第五福竜丸事件とその後の反核運動を扱った第 9 部の《焼津》、第 10 部の《署名》（ともに 1955 年）だが、その前の段階で、すでに同時代の出来事を絵の中に取り込んだといえるからである。無論、1952（昭和 27）年の出来事を 1945（昭和 20）年の被爆時のそれに置き換えてはいるが、かつてのように、被爆の瞬間に向かうのとは逆のベクトルが現れた点は重要である。

このように、丸木夫妻の《原爆の凶》にあっても、1951（昭和 26）年からすでに被爆を描くことに変化が生じていたのである。

（3）1952 年の独立以後の状況

すでに触れたように、占領時代、原爆の報道はプレスコードによって規制され、被爆当時の写真が一般の目に触れる機会はほとんどなかった。丸木夫妻が被爆の写真を手に入れたのは、左翼側が規制をかいぐって進めた収集活動にも負っていたらしい。

一方、山下菊二（1919－86）は、《オト・オテム》（1951年 図 30）で、ケロイドの痕が残る痛々しい少年を描いたが、これは、アメリカのグラフ雑誌『ライフ』に掲載された、ABCC で検査中の少年の写真を元にしてしている⁽³⁵⁾。『ライフ』はアメリカの雑誌なので、このような写真も自由に掲載されていたわけである。山下は、それを参照して、他にほとんど例のない、ケロイドの生々しい絵を描くことができたのである。

こうした報道規制の状況は、1952（昭和 27）年 4 月、サンフランシスコ平和条約の発効と日本の独立で大きく変わる。この年の 8 月、『アサヒグラフ』は広島・長崎の被爆の記録写真を公開した。それらは多くの日本人にとってはじめて見るものであった。その凄絶さ、その生々しさは、ちょうど同じ頃、中間報告展として発表された福井の《原爆記録画》の描写をはるかに凌駕していた。もちろん、被爆したものにとっては、四角く区切られた写真では、その凄まじい体験を伝えられないと感じられただろうが、それでも、その公表は衝撃的であった。

おそらく、美術が原爆を記録することについては、これらの写真の前でなんらかの再考を余儀なくされただろう。丸木夫妻の《原爆の凶》は、上述したように、その前の段階から変化が見られるが、徐々に記録的な描写から離れていった。1953（昭和 28）年に《原爆記録画》を完成した福井は、1960（昭和 35）年にもそれらを展示する機会を設けたが、1967（昭和 42）年に《ヒロシマの怒り》（図 31）などを制作するまで、新作を描くことはなかった。しかも、《ヒロシマの怒り》は、もはや記録画的なものではなくなっていた。彼ら以外でも、記録画的な作品はごくわずかで、散発的なものにとどまった。例外は、神田周三が 1955（昭和 30）年

の《死の行進》から 1964（昭和 39）年の《原爆後のヒロシマ喫茶店》まで、一水会に毎年発表した 10 部作だが、それも徐々に記録画というより宗教画に近づいていった。

記録画は、1970 年代に入って、市民の描く「原爆の絵」によって復活する。ただ、これらの記録画は、美術の領域に収まるものではなく、歴史的価値のほうに比重が置かれている。カメラは被写体がなければ成り立たないが、絵は記憶を元にしても作れるから、限られた現存資料の大きな欠落を埋める資料になるのである。

いずれにせよ、記録写真の公開だけが、記録画の衰退の理由ではない。新しい出来事とは別に、新しい美術の動きも記録画とは異なる方向に進む契機となったと思われる。とくに、ある表現が行われたことが、それとは別の表現を生み出すことになる近代美術特有の動きがある。もちろん、原爆の主題においては、その巨大さに対する美術的成果の断片性という非対称性も関係してくるだろう。原爆という未曾有の出来事を前にして、どのような美術の表現ができるかという問いは、繰り返し設定し直されなければならない。

この時期、文学の世界でも美術に類似した問題が起こった。1953（昭和 28）年、原爆文学の是非を問う第一次原爆文学論争において、記録文学や体験文学とは異なる文学が求められた⁽³⁶⁾。小久保均は、それらを第一次原爆文学とし、第二次原爆文学は、過去・現在・未来にまたがる根元的な問題を扱わなければならないとした⁽³⁷⁾。この問いを美術も共有していたわけである。

もちろん、こうした正論に対し、その解はあくまでも個としての、紆余曲折に満ちたものにならざるをえない。広島在住の美術家には、被爆地を本拠としている美術家ゆえに原爆を表現すべきという要請がある一方、原爆を食べ物にすべからずという批判もあり、彼らは両方の声に引き裂かれていた。原爆を主題にした作品に対する拒否としては、先に述べた新延輝雄が、原爆を主題にした自作を破棄し、その後制作しなかった例、あるいは、被爆した画家でも、灰谷正夫（1907－85）などのように、原爆をそのまま描くことはしなかった例など、いくつもあげることができよう。

（4）第五福竜丸事件

1952（昭和 27）年の被爆写真の公開に続き、1954（昭和 29）年の第五福竜丸事件は、広島・長崎の被爆を再認識させることになった。原水爆の恐怖が国内に広がる中、広島・長崎の被爆は、一地方の問題ではなくなり、より広い原水爆や核の問題に組み込まれた。岡本太郎（図 32）や鶴岡政男、池田龍雄、中谷泰、土屋幸夫（尾道市出身）ら、様々な美術家たちが独自のスタイルによってこの事件を表現した。広島出身の美術家の中にも同様の試みをするものがいた。その際、広島や長崎に視線を向け直すこともあったが、記録画的な方向とは異なる動きを見せており、この点を確認しておきたい。

広島出身、東京在住の名井萬亀（1896－1976）は、1954（昭和 29）年 5 月、個展で原水爆主題の作品約 20 点を発表するなど、集中的にこの主題を扱った（図 33）。この時期、彼は抽象的な線を主要な表現としている。その線には、現実の事象を極端に還元させた、文字通り抽象的な線と、閃光や爆発などを慣例的に表す記号的な線とがある。これらの線の構成物は、これまで原爆を主題にした美術家が陥っていた過剰な感情や思いをそこに投入することはないし、見る側に感情移入を促すこともない。こうした突き放した視線はときに有効に働くことがある。記録画が降りていった被爆者の視線から一度離れ、高い位置から様々な事象を見



図 32 岡本太郎《燃える人》1955年 東京国立近代美術館蔵



図 33 名井萬亀《千百カウント》1954年 個人蔵

(34) 出原前掲「記録と表現—1960 年代までの作品について—」20 頁

(35) 出原均「研究ノート 山下菊二『オト・オテム』と『LIFE』『THE ARCH 広島市現代美術館ニュース』1995 年 11 月 第 12 号 4-5 頁。瀬木慎一「戦後 50 年美術界の明暗 29 戦争と戦後の美術 2」『美術の窓』1997 年 12 月 第 16 巻第 11 号（通巻第 173 号）100-106 頁（瀬木前掲書に再録 124 頁）にも、概論ゆえか引用等は記されていないが、拙論が述べられている。加治屋健司氏は、前掲「原爆を目撃した画家、しななかった画家—原爆の目撃とその視覚的表象」で、『オト・オテム』の他のモチーフも『ライフ』からの引用であることを明らかにしている。76-78 頁

(36) 原爆文学については、「物語 戦後・広島文芸史（1～48）」（『中国新聞』1959 年 10 月 6 日～12 月 7 日）、長岡弘芳『原爆文学史』（風媒社 1973 年）、ジョン・W・トリート（著）、水島裕雅、成定薫、野坂昭雄（訳）『グラウンド・ゼロを書く 日本文学と原爆』（法政大学出版局 2010 年 7 月 7 日）を参照した。

(37) 「再び『原爆文学について』」『中国新聞』1953 年 2 月 4 日（夕刊） 3 頁

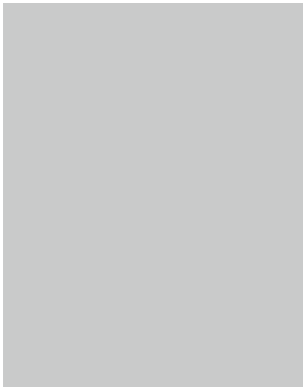


図 34 鶴岡政男《人間気化》1953年
宮城県立美術館蔵



図 35 本田克巳《黒い雨》1957年
広島市現代美術館蔵



図 36 増田勉《廃墟 (現、焦熱の死都 -12)》
1959年 廿日市市蔵

(38) 瀬木慎一「作家訪問 名井萬亀」『美術手帖』1954年8月 第84号 16-22頁

(39) 針生一郎「戦後美術盛衰史 6 戦争と平和の谷間で」『美術手帖』1963年7月 第222号 102頁(針生『戦後美術盛衰史』(東京書籍 1979年)に再録)。

(40) 出原前掲「記録と表現—1960年代までの作品について—」21頁

渡すことができるからである。「人類」という語を名井自身は用いる⁽³⁸⁾。名井の作品は、深刻な内容を表面的な軽さによって表現した鶴岡政男(1907—79)の《人間気化》(1953年 図34)にも近いといえよう。

広島出身の画家としてもうひとりあげておきたい。本田克巳(1924—)は、1950年代に頭角を現した画家で、虫のような胴体をした、無頭の人体を描き、当時、河原温の絵に対して称された「密室の絵画」に通じる美術家のひとりと目されていた⁽³⁹⁾。彼は第31回国画会に《黒い雨》(1957年 図35)を発表し、被爆した広島を主題化した。とはいえ、放射能を帯びた黒い雨を取り上げるところに、放射能が最も大きな問題となった第五福竜丸事件の影を見ることができる。本田は、彼独特の人体を厚塗りて描き、それをえぐるように黒の直線を引く。絵具がえぐられることと、放射能が身体を蝕むことを重ね合わせており、ひとつの隠喩である⁽⁴⁰⁾。

放射能は目に見えないので、記録画でこれを表現することは難しい。原爆という巨大な主題には様々な面があり、絵画もあらゆる表現を駆使して対応しなければならない。放射能の恐怖を視覚化するにあたり、隠喩は有効なもののひとつであろう。丸木夫妻も、造形上のものではないが、「幽霊」という隠喩で被爆者を表した。隠喩は表現の妙の中に閉じこめる危険性もあるが、その特性上、ある事象を別の世界に広げていく力があるので、核の表現においても有効なのである。

(5) 1950年代の美術動向

1950年代、まず、幾何学的抽象が広がり、その後、アンフォルメル旋風と呼ばれる不定形の抽象が爆発的に展開された。一方でルポルタージュ絵画などもあり、その動きの中で原水爆関係の作品も制作されたが、この時代の美術の大きな特徴のひとつは、抽象画の興隆である。

ヒロシマの主題を最も持続的に制作してきた増田勉の表現は、既述の《夜曲》以来、半抽象であった。1950年代後半、こうした熱い抽象の動きに彼の作品も影響を受けた。1950年代末頃から作品はより抽象性が増し、いわばレンズが広角からクローズアップへ、対象が風景から静物へ向かうかのような変化が起きる。瓦礫や石といった断片に原爆を象徴させたのである(図36)。それとともに、絵画の物質性を表現として積極的に利用し、そうした物質の中に自身の感情や思いを込めるようになった。

この種の絵画では、時間は曖昧である。半抽象の画面は、1945(昭和20)年8月6日に定位しているとは必ずしもいえない。少なくとも、そのような時間を表さない作品がある。増田が作り出す世界の時間は、いわば宙吊りのような状態になり、ときに彼の制作の時間、あるいは、彼の感情が湧出する時間のほうが露わになる。無論、それは彼の作品だけでなく、抽象画の特徴のひとつだが、原爆を主題とする作品にとっては根本的な問題であろう。

他の美術家の作品にも、一見しただけではヒロシマだと分からないものが増えていった。独自に造形記号を創り上げる場合はそうした傾向に拍車が掛かる。一方で、それとは逆に、様々な内容がヒロシマに関連づけられた。ヒロシマは、徐々に内向し、拡散していった。もちろん、それは、美術というものが進んでいく当然の帰結であって、そのこと自体は非難すべきではない。その中にあっても、ヒロシマを新しく表現し、ヒロシマと美術の関係を更新し、私たちがヒロシマと新たな関係を作ることができる優れた作品は生み出されてきたからである。

目黒区美術館で2011(平成23)年に開催予定の「原爆を視る1945—1970」が中止となり、同

展図録のために執筆した原稿が日の目を見ることができなくなったことを惜しみ、ここに再録する。再録に当たっては、1960年代以降の記述が断片的なので削除し、文章も達意を心掛けて全面推敲した。趣旨および構成は元の原稿と変わっていない。1995(平成7)年広島市現代美術館開催の『ヒロシマ以後 現代美術からのメッセージ』展図録に執筆した「記録と表現—1960年代までの作品について—」を再検討したので、題名を「記録と表現再論」とした。

本論を執筆するに当たり、下記のご協力をいただきました。記して感謝いたします。

故入野忠芳氏・金田晋氏・寺本泰輔氏・道面雅量氏・松永伸己氏・広島市現代美術館・広島市立中央図書館・広島平和記念資料館。また「原爆を視る1945—1970」展担当だった正木基氏からは文献資料の多くと様々な助言をいただきました。

した。高村君処へは大変迷惑かけて銀行の人に宿迄荷物の面倒を見て貰いました。宿はいかにも静かな上に離れて小山の上にあるので淋しさたらお話にならず。湧水の音がなければお話にならぬ。遠くではお寺の木形の音が時に聞える位です。乱暴さはお話になるまいけれど御手洗と大差ない。景色を見に登ったがやはり想像して行た時は大概はよく見えないのです。描けるかを懸念していますが、とにかく明日もう一べん登って見ます。十九日は静とおちいさんが高村君所へ来る由。夜分には行って見る積りです。

209 9月17日【消印】 下落合 滋賀県坂本（日吉神社□内□館）
今日は高村君宅で、おちいさんと静子とに会いました。御連中明晩も泊まって行くらしい。僕の方は仕事の都合で坂本に帰りました。今日は霧込み登山しても湖水が漸やくあるかなきかの程度に見えましたが其換りに奇麗でした。写生していると天候斗り気にしてならぬ。思うていたのと大変な変った感じです。出来上るかを心配しています。淋しい宿も少し馴れました。今明日は江□はお祭りの様なのですが賑やかとは見えません。

210 【封書】 9月18日 下落合 滋賀県大津市坂本町角 不動貯蓄銀行社宅 高村方（差出先は飛松書き込みによる）
十五日に神戸の連中、来津。十七日午后二時頃帰途につかれ候。小生十五日高村氏宅にて夕食伴にいたし十時半頃坂本に帰り候。其翌日十六日午前三時頃より例の腹痛が起り以前程には堪えられぬ程ではなくも何となく不安の内に夜が明け早速薬だけは服用し候えども、どうも激しく来そうなので荷物は宿に置いたまま午后一時、やっとの事電車に乗り（其間よく倒れなかった事を不思議に思う程苦しく候）高村氏宅に、ころがり込み、とうとう本病人の扱を受ける様いたし候。事によれば京都迄行こうかと存知候も道中が永いので、とにかくこの宅に来て相談する事に定め申し候。夕方医師来り診察の結果たいした事はなし注射する程でもなし。多分大腸カタルか少しは盲腸に来ているかもしれずとの事にて、肝油を吞まし候。其夜中はやはり痛み続け申候故、頓服を貰うて漸やく夜明け迄寝むり申候。十七日午前七時頃薬のため下痢あり。それより漸やく凌ぎよく相成り寝て居ては痛たを感じぬ程に相成り申候えど腹の筋力いていたい事はなかなかに候。午后医師来診、盲腸の方に関係がない様に思われ、大腸カタルの方の様との話にて今暫らく静養すれば坂本に帰っても宜しいとの事にて、大した事にならずに済んだと申しおり候。十八日の朝迄、どうしたものか熟寝せず、うつらうつらと神経疲れいたし候事と存じ候。今日は漸やく二階に上り、手紙書く事が出来、顔を風呂場で洗う事が出来るように相成り申し候。折角元氣になりかけて又逆戻りいたし腹立たしく存じ候。お腹は未だぐるぐる鳴り水の様なもの斗り下りおり候。それは、おも湯と通じ留めでない薬の関係かと存じ候。今日医者又来診の節聞いて見る積りに御座候。以上の経過故始のうちは東京から来て貰うかと思うて見たれどとにかく高村氏宅に来てからの事と存じ暫らく控えており候。此分で順調に行けば何処へも知らさずに済むかもしれずと存じおり候。

未だ少しは痛みもあり元氣更になく候故、絵も描きかけ其儘故、後相当に日数が延びるやもしれずと存じおり候。描いている処はケーブルを登りつめてから三十間斗り行った所、宿からはケーブル登り口迄約二町故今迄にない歩く事の少い距離に御座候。病氣の原因はこれぞと申す理由は見当らず候。お目にかかった節お話したら多分其事であろうと想像付くかもしれず候。とにかく知らさずに居て大変な事になるといけぬ。一寸お知らせして置く可く候。高村氏夫婦はなかなか要領よく面倒見て呉れ候。又其内に書きます。新町の方へは知らさずいたしおり候。うんと悪くなれば京都へ行かもしれず候。それ迄は心配する故内処にいたし候。昨日土地の女、□□を持っ

て参り候故、小生の食用のため三百目程買って置き候。今の分では心配いたさずまじく候。先は 金山 昭和三年九月十八日 らく殿

1929（昭和4）年

211 1月29日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
昨夕、予定通りに着いたしました。今日迄は腹の区合いは変わりません。此分ならば大丈夫と思います。心配をかけるといけぬ故注意しています。正月元日あたりに一度降雪した切りです故大概は想像が付きましようが、今日一日探しに歩いて見たら描けぬ事もなさそうです。今日は描いていぬ故疲れてはいません。朝晩はおかいにしています。当分其方が安全のようです。寒さは余程寒むいらしく湖水は水厚八寸位だそうです。

212 2月1日【消印】 下落合 下諏訪（桔梗屋）
雪を待つ間にとモデルを□□□□お願いした。早速と奥様の妹を世話して下さい。今日から描きかけて見る積りにしている。雪がなくとも面白い処なれど雪を見付けているので、やはり降った方がいい。昨晩守一君と清水君が尋ねて来られた。久し振り話話がはずんで、とうとう二人共に泊めてしまった。お腹の方、相変わらず降り腹なれど痛は日に日に薄らいで行く様です。今はビクビクしています。無理は御安心なされ。

213 2月4日【消印】 下落合 下諏訪（桔梗屋）
毎日天気続きにて当分は降るまいと存じおり候。寒むい事は例の通りにて絵の具は堅くなって描きにくう候。湖水は未だに六寸位の厚さは有り候。昨日一寸湖水に参り候。鏡のようにて宥ってあぶなく候。昨日お手紙の豆蔕を明神様にて始めて見物いたし候。大して変った事は無く鬼が居た位に候。

214 2月6日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
雪は未だ降りません。暖かい時は三月の中頃のようにですが風が吹くと忽ち、一月の気候に早変わりします。疲れるので夜は遊びに出ませんし、未だ一人故気楽で居ます故御安心下され。

215 2月9日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
今日は義理だけ雪降りましたが、気分は大変変る事と思います。晴れたり曇ったりしているので奇麗な事は申し分ないけれど瞬間だけで描けぬ。五日出のお手紙の様子では猪喰貝連のウルサキ事御面倒にてお気の毒ですがしかたありますまいが我慢して、お付き合いして下さい。

216 2月11日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
お腹は相変ずやわらかですが痛はなくなりかけました。只今お手紙を受取りました。手紙の度に事件はないのかと案じています。猪喰貝の事はうるさい事と思いますが在京中なら、多分少しでも引きずり込まれなければならず、他の方に気の毒なれど仕事の方には助けて貰った様です。不在中は忙わしくてお気の毒ですが我慢して下さい。今日は紀元節にて仕事を休もうと思いましたが一寸一時間斗りリンクで描きました。精々一日に二時間ほどしきゃ描かない事になっています故御安心下され。

217 【封書（絵葉書2枚入り）】 2月13日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
只今十一日出のお手紙受取りました。ルイの事委細書いてあります故、大概は想像が付きますが、そんな面倒な病氣としても原さんの処にやっては先ず駄目ではないと思いますが如何（入院）。とにかく診察して貰うておいて、うちで当分、別にして置いては如何と思

いますが、それとも危険の様ならば当分原さんの処で預かって置いて貰うても宜しい。其積りで又うちに連れて帰ってもいいですが小生の素人考えでは、あのきたない物を痛くてよい故出来るだけ洗って（ノミ取粉など）始終奇麗にして貰ったら動物の事故、少しは結果が出はしないかと思われます。病院で死なす事は可愛そうです。しかし他に移っても面倒故、小生がここで考える事は一寸むづかしく思います。松村君と相談して置いて下され。岡谷で昨年見たルイの様な犬はもうおりません。大変要領を得ぬ申し様なれど皆もこの通りではないかと思います。先日の雪は二分斗り、昨日は五分斗りと皆申しわけだけなり。湖水は大□波立ち本年は殊の外いつもと異なりおるそうです。とにかく仕事だけはして置く積りにしています。お腹の調子は大概はやわらかなれど一、二度やや宜しき時あり、追々宜しい方向向うのではないかと思われます。夜出ない故消化が充分でないらしいので、夜より□□□ます。金山 二月十三日【以下、上部に追記】一昨日より又急に寒むくなりました。成るだけ外ではあまり描かない様にしていますが描いても早く□□にします。一昨日守一君の内御馳走になりました。岡谷、湊□のお百姓の家には未だ行きません。岡谷の鳥屋のおじいさんが死んでしまったのであの家には沢山いません。がっかりしています。木啄が又そこに一疋いるそうです。

218 2月15日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
キレイなハガキはこれですまい。ルイが少しでも助かるかも知れなければ当分原様の処に預けて置きましょう。其内に私も帰ります故、そのかわり逃がさぬ様にして堅く云うて置いて下され。腹はだんだんよさそうです故御安心下され。もう十七日にもなったかもしれぬけれど絵はなかなか出来ず。モデルは手古摺るし漸やく二十五号、一枚出来た位故、其方の土産はあてにせずに置いて下され。とにかく一日に三時間以上描かない事にしています故、捗りも少ないわけです。とにかくもう一、二枚は出来ない和不愉快です。大病の後故、気分の落ち付かぬ事と頭腦の働かない精もありましよう。二十五日頃迄に帰る積りにしていますが、懐がどうかと案じます。其節には申し上げるかもしれません。アテネ通いは賛成します。

219 2月18日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
今朝、始めて雪らしい雪が降って真白になりました。あまりに遅い節です。岡谷で二枚が描けましたが、それは手古摺りものにならず。モデルも切り上げて、これから、小さなものを、やる積りです。二十五日頃には帰れると思いますが其節は迎いに来て下され。懐淋しそう故金二十円、送って置いて下され。（たりぬと、不都合故）。ルイは如何いたしましたか。帰る日に間もありませんが、二日程来諏見る気にはなりませんか。先は。

220 2月20日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
帰京は二十四五日にしていますが若し来らるるならば其積りにしてお越しなされ（アテネの方が宜しければ）。一昨日降った雪は一日にして解けました。昨夜は増沢さんと、守一君と、おかみさんと私の室でご飯をたべて、永く迄しみじみ話をしました。上諏訪は大変開けて先日行って愕きました。共同湯の大きなのも出来たし、蒸し風呂も出来たそうです。

221 5月8日【消印】 下落合 山形県大石田（榎本屋）
花に遅れているかと心配して来て見れば花は未だ未だ十日も後らしい。宿の庭は四五尺も厚さの雪が残っていて五日は山麓の方は二尺も降ったそうです。いよいよだめなら場処を換えて見る積りなれど一兩日落ち付いて見ていましょう。汽車はゆっくりしましたが、スチームが遅くに通ったのと汽車の中故寝られず過ぎました。今

日は寝むいのでふらふら。おまけに雨故昼寝をしました。青草も未だありません。花も青草もなけねばヘンなものです。

222 5月9日 下落合 大石田（榎本屋）
八日出の手紙拝見しました。バラスの土は若し直して貰えるならやっても宜しいけれど僅かなら石を入れている間に自然のままになると思いますけれど。昨日横山村の村長さんの庭で描き始めましたが花が少しもなく今に咲くであろうとの希望でやっているのて実たたよみなし。七日着早々より少し発熱、汽車中の疲れと寒むかったためとの風邪と思いましたが、少し苦しいので、とうとう医者に診て貰いましたら、やはり風邪らしいとの事で今日一日辛棒して寝ています。それでも八度あまりありました。

223 5月10日 下落合 大石田（榎本屋）
来てから一日も満足な天気なし。漸やく薬も一日分呑み終り床上げをしました。あい悪くや今日は降雨では昨日と換ってくれればよいかと思っています。未だ少し疲れています。多分熱の後であるからと思われます。今日少しぶらぶら雨の中を歩いて見ました。当地の結婚式らしい珍しいものを見ました。ミヤマにウグイスが沢山居て至る処聞くので其度に内に居る気がします。あまり似ているので内のが来ているのではないかと思う程です

224 5月11日 下落合 大石田（榎本屋）
今日は天気らしいので久し振りの気持ちで出かけました。夕方、夕立と雷で大変でした。丁度横山村の寺崎氏宅に居ましたので休んでいました。宿屋の女中と子供が傘を持って此辺を探し廻ったそうで、可愛そうでした。とうとう会わずに帰って来る途、橋の上で子供が又迎えに来る処でした、田舎の気持ちがよく出て気持ちがよう御座いました。スモモは咲きかけましたが梅が未だ咲いて居て桜と間違ひそうです。八重桜は三分位の所、桜桃は未だ。宿屋では未だ赤腹は出しません。

225 5月13日 下落合 大石田（榎本屋）
病氣の方はもう大丈夫らしく思われます。今日も午后降りだしました。花は今年遅いが其換り桜などは今迄に見ぬ美しさを感じています。そろそろ何にもかも咲き始め木の芽も青く楓の赤さは一層奇麗です。旅費は大概大丈夫と思いますが、どう見積っても植木やが大分重過すると思います故少し節約して置きます。

226 5月15日 下落合 大石田（榎本屋）
昨日は大雨でしたが今日は曇りながら晴れました。花はそろそろ咲きかけました。ラビが夜遊びの時に庭に廻らぬ様にしてある筈ですが、帰って見ねば分りません。ルイは追々、弱るようなら、あまり洗われません。私帰る迄は死なぬと思いますけれど、運動不足はあるかと思います。植木やのツケは多分あれ位と見当をつけて見ました。しかたありません。こちらは何とかして居ます故、後のは送らずとも宜しいかと思います。中庭の雪は未だ三尺程積って居ます。御子柴君からの絵は開けられればあなたでお開け下されても宜しく松村君を頼まなくても宜しい。あのままにして置いて大丈夫かと思っています。私帰る迄、あのままにして置いた方宜し。

227 5月18日 下落合 大石田（榎本屋）
花は今盛りです。今年は後れていただけに、一度に咲いて色も目さむる斗り。しかし、もう帰る時と相成りました。花を描くの何となく追いかけらる様で、いい絵は出来ないものです。二十二日位に多分、東京に帰る事になりましよう。いずれ其時はお知らせをします。美しい事は今迄にない様に思わる程です。宿の中庭の雪は

漸やく今日取り払いました。山はまだまだ白く丁度二週間いつもより後れています。

228 5月19日 下落合 大石田（榎本屋）
二十二日頃に帰れると思う。汽車はここを朝の九時二十四分に発って赤羽に夜の十時半に着。其積りにて御都合でお迎いを願います。夜汽車は一寸遠慮をして置く。ルイには困りましたが私帰る迄居て呉れるいいと思いますが、今度は懐の都合にてどこへもよらず土産物もありません。出発の時に電報でしらせませす。

229【封書】7月24日 仙台市中島町八十三 砂川泰様方 下落合
如何いたしおられ候や。多分はお忙はしいのであろうとは存じ候へども平素に似合わぬ無精なやり方、お案じ申し上げ候。家の方は変わった事無く此分御安心下され度候。二十八日に又狂犬の予防注射申来り候に付若し其日午前中に御着京の様ならばお迎えは出来兼ねるやもしれず、一寸申上げ候。御出発後はやや東京も前とよりは凌ぎ宜しく相成り候□馴れたためかもしれずと存じ候。仙台は如何。砂川様御夫妻に宜しく。

230 10月25日 下落合 長野県北佐久郡軽井沢峠町(水澤清文方)
赤羽二時四十四分発で軽井沢へ七時半着。途中の紅葉は見えず。つるやより頼んで貰って、漸やくここに落ち付いています。ここはダンゴと一緒に喰った家で中はなかなか寛く一寸泊まれる順備がしてあります。夜はランプで早く寝ねばならず食後の散歩がないので夢見しました。今日は霧か雨かさっぱり分らず麓では多分、雨でしょう。ここは周囲はさっぱり見えぬ。籠城の初めかけ。此前来た時とよりは印象が変わって見え、多分描けば変な絵を描く事と思います。寒むさは冬と同じで、つるやでも、ここでも、こたつをして貰っています。昨日は天気でしたので大変寒むかったのですが今は雨で、それよりは暖かです。多分、こたつに、はいっているからでしょう。初日の雨で一寸心細い。二十畳の部屋で一人きり。おばけが出そう。昨日風呂をたいて呉れて、助かりました。今日は暴風故郵便屋は来るかしらん。

231 10月26日 下落合 軽井沢峠町（水澤清文方）
今日は雨でおまけに暴風。散歩に出られないでお腹のぐあいが悪い。動く方法を考えねばならん。郵便屋は朝七時頃に一度来るだけ故、東京への通知は変な事になると察知をねがいたい。昨夜は雨洩りがして濡れた物はおこたで乾かしている処。昼は洩った処が変わった故、夜中に顔の上へでも洩らなけねばよいがと思う。風呂は今日たてて呉れて大助かり。何んでも変った事をして呉れると気がまぎれる。今一斗り歩いて来た。もう行く処はなし。一人居の淋しさよりも少し展覧会での疲れが取れそう。なる程ここに居て試験順備をすればよいと思う。

232 10月27日 下落合 軽井沢峠町（水澤清文方）
今朝御手紙頂きました。今日は漸やく天気で一寸気が晴れました。二日の暴風雨で紅葉はだい分に散りました。冬枯れの様に見えます。見物客は大変に登って来ました。軽井沢の方はこれからがいいのだろうと思います。峠では大して物になれそうなものもありません。あまり動かないので、おなかも大して空りません。団子は未だ喰えていません。妙義は描けそうにもなし。峠の家は殆ど神官(茶店内職)の家ばかり。小生のいる家も、それです。天気が続く事を祈っています。

233 10月28日 下落合 軽井沢峠町（水澤清文方）
『浅間の烟が東に流れりゃ雨だ。今日は朝から浅間の頭が見えぬ。

見えぬ筈だよ、もう霧が降る。』『いつも天気の様様斗り報すが、報すものとて外にない』『夜は外には出られぬ処。出ても暗黒だよ坂道斗り。』『星の光りは時にはよいが、樹下小道には、何にもならん。』『めしを食ってもおなかは、へらぬ。へらぬ筈だよ、こたつに斗り。』『高文試験の順備にゃ持ってこい。宿じゃ少しも相手にしない』『お早よう。お寝み。一日の中にそれだけ云えば寝る斗り。』又も雨になりにけり。手紙は二度受取った。つるやでもここあてでも宜しい。

234 10月29日 下落合 軽井沢峠町（水澤清文方）
今日はとうとう降られけり。霧深くして昼の間も散歩にも行けず。それでも見物客は時々登って来る。霧雨は一寸凍っていた。此頃は四十度内外と出ているも今日はよほど寒むかったらしい。天気がよければ見た処はすばらしいのだけれど小生の空は丸で芝居の道具立の様で裏の□をあけると妙義の方が風で廻転している。

235 10月30日 下落合 軽井沢峠町（水澤清文方）
今日は半日天気で霧が来た。麓が見えても峠は霧の中。書く事も種はつきた。もう二三日天気で描けたらつるやに帰る。絵は皆手古摺り。去年の病気後は何となく熱が薄い。大いに奮発が要す。手紙は来月二日頃からはつるやの方に下され。峠に若し居ても廻わして呉れる。

236 10月31日 下落合 軽井沢峠町（水澤清文方）
ここに来てから着いた日と他に一日天気であっただけ。もう天気予報は書かぬ。雨の中を横川の方に下る坂を十斗り歩いてみた。暢気で格別の気持がした。霧が降ると山も平地一向に堺がない。麓の方の横川はかすかに見えるが吾々の居る所だけ雨。変な気がする。十一月の三日は書き出し日故、店やは今からよりを□けているが雨だと可愛想。夜は皆しかたない故、換り換りあちらこちらの家を探ねて、しゃべっているだけで年を過すらしい。

237 11月1日 下落合 軽井沢峠町（水澤清文方）
多分三日につるやに降りて行きます。多分降りた後から天気が続きましょう。多分気を腐らせているから手古摺るのであろうけれど。多分病後の頭脳が動かないのと、あせる精だろう。何んでも多分にして臆らめてからなると多分病気に掛るかと案じられる。こんな事を考えている故多分病気には、かかるまい。昨夜は軽井沢から商いに来ている内の三味線のお師匠が夜遊びに来て九時頃迄曳いていた。こんなものでも、うさ晴し、お蔭でお腹が少し楽になった。今日はお一日で栗のこわ飯で御馳走。

238 11月2日 下落合 軽井沢峠町（水澤清文方）
今日は一日中霪の中で暮しました。夕方に晴れそうでした。とにかく明日つるやに行きます。夜になって星が見えたが外は相変わらず真暗がり。一日何もしないのに疲れている。寝るにもお腹がいっぱいで困る。宿の犬が今朝を取って来たのを今晩は御馳走になった。やわらかくて美味かった。十一月二日 峠にて 金山 正宗律四君の宛名所は手帳にない。しまった事をした。

239 11月3日 下落合 軽井沢（つるや）
とうとう下りて来ました。峠では星を見た日は二晩だけでした。下りは三十分で来ました故、こんなに近ければ通った方がましであったと思う程でした。今夜から電燈の下に居る事が出来ます。町で人を見ましたし、店やもありますので、此頃の淋しい軽井沢も多分今夜だけ私には慰めになります。御送り下された手紙も順序よく峠からのと町からのと受けとりました。荷物も着いています。五日頃に宮本君が来ると宿の方に通知があったそうです。今夜から唾の業を

せずに済みます。軽井沢 つるや 金山 今日久し振り天気で峠は賑か

240 11月4日 下落合 軽井沢（つるや）
お菓子はなかなか上等でこれなら何処に持っていても辱かしくない様に思います。とにかく、こちらはお菓子らしいのを食べていない以上、ほめて置いて間違いなし。今日は天気で少し気分が落ち付いた。これで天気が続いて呉れるといいのだけれど。□□は東風が吹いていた故□□にならん。【コピー薄くて数字判読不可能】漸やく峠に居た山流者なくなった感をした。これから町を腹へらしに歩いて来る。十一月四日 つるや 金山 お菓子の換りに□□を【コピー薄くて数字判読不可能】お送りします。

241 11月5日 下落合 軽井沢（つるや）
□□□□大変いい処らしいけれど未だ小生は往て見ない。多分絵で見た方がよさそうなり。つるやに来てやれやれいたした様です。出歩くせいか、よく疲れます。峠よりはやはり温かいようです。紅葉はもうありません。今日も天気で宜しかったがこれも永続きはいたしませんまい。雨に降られたらなっていないが隣の家にカケスがいる。近くには白い犬で一寸□□に似たやつがいる。昨夜散歩で近所の変な犬がなつについて付いて来られて困った。帰すのに其家を知らぬ故、田舎もやや外人馴れている軽井沢の犬はいじめられていぬ故犬らしい処がない。どいつもおとなしくて吠えているのを聞かぬ。

242 11月6日 下落合 軽井沢（つるや）
明日雨らしい。一寸心配。もう二日程照って呉れるといいと思うけれど、今、宮本君から電報で明日ゆくと云うて来た。早く来ないと雨になるので今瀧澤さんが来たと宿の主人から通知が来た。コノハガキを出してからお会いしてみよう。木の葉は殆んど落ちて冬枯れの様。富田君からいただいた菓子は未だある。明日あたり終まいになりそう。あの菓子は大当り。

243 11月7日 下落合 軽井沢（つるや）
今日は一日中雨天にて、ゆわゆる精養の日でした。宮本君は来られまして瀧澤君とで漸やく賑かになりました。雨の中をリンクの辺とぶらつきました。なかなか宜しいでした。雪の時だと、美しい事と思います。宮本君は鉄砲打ちと兼ねて欲張っています。明日天気になればよいかと思っています。風月堂の差し入れがあったので喰べる方は心丈夫になりました。

244 11月8日 下落合 軽井沢（つるや）
今日は曇りで一寸困った。一枚でも描き上げて帰りたいと思うが、もう予定の十日になりかけて来ている。前から天気になって呉れなけねば困まる。大概は十日に帰る予定にしているけれど事に依ると一日位後れるかもしれぬ。多分軽井沢を五時頃発のやつに乗る積りにしている。定まればお知らせをする。そして電報でも打ちましょう。宮本君は今日は鉄砲打ちで山鳥をとって来た。明日は御馳走になるだろう。

245 11月9日 下落合 軽井沢（つるや）
明日、天気ならば明後日十一日に帰ります。十日に帰る積りなれど一日延ばします。帰る時に電報を打ちます。赤羽を六時五十分着か九時五分着かのどちらかにします。神戸の方へ通知。其積りしていて下され。今日は宮本さんの山鳥の御馳走になりました。

246 11月10日 下落合 軽井沢（つるや）
今日は雪降り紅葉のあるのに雪が降ると云う調子でなかなか寒

い日です。もう一日天気の日を待っていたいのですが駄目でしたら思い切ってしまう。雪がいくあいに降らば一日スケッチして行きたいと思いますが、いづれ電報で。

247【封書】11月20日 京都市新町通り三条下ル 牧田忠一方 下落合
途中悪なくお着きの事と思う。二人の出発故淋しくなったとお政さんが云うている。長尾様の処は阪急の岡本で下車約二丁。兵庫県武庫郡本山村字岡本。【「岡本駅」から「長尾様宅」を示す説明用の地図あり】山田様の処は日本綿花の方は中の島で梅田の駅から本当に真直ぐに行く電車で大江橋か淀屋橋あたりの近くと思う。御都合に依りてお宅に行かれても宜しい。【「日本綿花」と「お宅」の説明用の地図あり】コノ辺山田様宅（天王寺駅より約二丁半）夜は門が閉まっている故其積りでいなされ。山田様の住宅は大坂市住吉区松崎町二三三二（多分今も西三明と呼ぶでしょう）加藤君の処はまぎらわしい。【説明用の地図と地図内の説明あり】手紙を出したり返事を貰うている内に帰京する日が来る。今の処変わった事なし。今夜は（今晩）地震あり。ナナは少し、うろたえていたけれど、お政さんは知らなかったそうなり。二三日しないと落ち付かれぬ。先ず御安心あれ。皆さんに宜しく。時間があつたら高雄に行っていらっしゃい。（其時は横尾も榊尾も忘すれずに。昭和四年十一月二十日 下落合二〇八〇 金山平三 らく殿 内にいると手紙の言句が多くてエハガキではいかぬ。一寸損なり。

248【封書】11月24日 神戸市花隈町四四八（金山春吉様方） 下落合
もう神戸に居てる時分と思う。こちらは別に変わった事なし。□君の細君が来られて一寸お話ししたい事があつたらしいが僕ではお気の毒でした。廣幡さんが来られた。家屋税の件は済ましておいた。留守中はやはり落ちていていぬ。いつ仕事が始まるか不安。ナナの背のおできがルイの様なので原さんに見て貰らったら、そうでもなさそう。段々大きくなる故今日午過ぎ一寸切り取って貰らった。もうそろそろ注射のさめる時分で今晩は一寸うるさいと思う。展覧会の切符とにかく送りました故宜しき様に処分して下され。毎晩一通でも手紙を書いているが、なかなか苦しい。昨日から急に寒むくなって来た故、おちいさんはよい時に帰ったと思う。青葉はしおれる、落葉は激しい錦樹は紅葉する、冬枯れ始めの淋しさは又特別の趣きがある。画室の外の烟突をつけて貰らった。貴女の方の手紙は少ない。大した事件もなさそう。僕は未だ誰れの家にも訪問せぬ。夜出るとお政さんが可愛そう。もう四五日で帰って来る予定故、大して手紙は差し上げられぬ。先は。

1930（昭和5）年

249 1月24日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
新宿から乗った時とより追々乗客が減って楽に諏訪に着きました。いつもの通り雪は少ないけれど、途中は何処も雪が少ない。却而其よりはここの方がある位。今日岡谷方面に行き山の上から描く事にしました。十日も通うのはえらいけれど、辛棒辛棒。宿を出がけに忘れ物をし、おまけに写生地で三脚が折れて平腰で描いていた。帰りに諏訪に廻って三脚を見付けて来たが一寸疲れた。

250 1月28日【消印】下落合 下諏訪（桔梗屋）
毎日岡谷に廻って居ます。山登りはなかなか骨折りです。天気がよい換り雪は少ない。そのかわり歩くには楽。昨日岡谷に火事がありました。今日汽車で守一君に会いました。大してお報らせする事

はありません。火の用心。軀をお気をつけなされ。

251 1月29日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
今日は雪降りて真白。大きな絵は一寸休み。天候が不順で困まる。本年は諏訪は暖かそうなれど小生等には同じ事。湖水の水は薄くて競走の時に二十人斗り落ちたそう。話す相手なしにお腹はへらぬ。外に出るには道が悪くて歩けぬ。凍ってしまえばよいが今夜は駄目らしい。ここは□□は高いからやめる。

252 1月31日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
昨夜、増沢さんと守一君、来られ、一緒に夕食いたしました。毎年雪の絵を描いているが、其度毎にむつかしい。始終色が違って行くせいだろうと今更ながら恐れいつている。明日は明神さんのお祭り。本年は暖かいそうだが、いつも凍水しているので、やはり寒むいのだろうと思う。一昨日お手紙拝見。

253 2月3日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
（コピーが薄く判読不能）

254 2月4日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
明後日六日午后五時四十分頃新宿着の汽車で帰る積りです。変更いたします様ならば、電報でも打ちます。新宿着が混雑する時間故、どうしようかと思いましたがそれがよさそうです。お迎えをお頼みます。此間、上諏訪の蒸し風呂に一時半もはいていたら、帰りはへとへとに疲れました。

255 2月8日 下落合 横川駅（萩の家）
妙義には未だ雪が残っていますが、宿の乱暴さは此前とより、より以上でとても辛極しきれまいと存じます。明日は多分軽井沢に逃げましょう。ここに居ては病氣するかもしれぬ程です。宿が確定したら知らせます。とりあえず、 横川駅の例の宿やにて

256 2月9日 下落合 横川駅（萩の家）
ここで辛極せねばならない事になりました。汽車の便が非常に悪いので其の積りに非常に注意せねばならん。昨夜は風邪引かず傷みましたけれど、手紙はお送り下さらずとも宜しい。要事のある時だけで宜しい。今日は三四寸積りましたので、山の方は、これで当分残っていきましょう。今日は描かずにいました。天気が快復してから始めます。昨夜は月夜でしたのに急に変わった天候でした。一日中降っていました。

257 2月11日 下落合 横川駅（萩の家）
今日は電燈も紀元節でお休みと見え、町中は真暗。蠟燭でハガキを書いています。今日は晴天で折角積った雪が消えそう。天候の都合で滞在日程不明。碓氷峠よりは町歩きが出来るだけましなれどもう行く処はない。もう一度でも降って呉れねば描くのに困る。二月十一日 横川、おぎのや 金山

258 2月13日 下落合 横川駅（萩の家）
雪がなくなりかけました。赤羽多分十六日の午后九時着の汽車で帰ります。雪がそれ迄降れば少し延期するかもしれませんが。確かに定らばお知らせをします。風が強くてとても外では描けません。

259 5月5日 下落合 大石田（榎本屋）
花は遅いが過つんで終ったのではない。いつもの帰る少し前位のようにです。横山の村長さんの話では『雪は二十日も早く解けている故温気は其位早いらしい』と。南君が早く来ないと雨で散らないか

と心配していますが、折り悪しく今日は暴雨で、心配です。これから所を探しに行きます。昨夜は日曜でポスト局休み、このはがきは小生の到着より、ずい分後れて東京に行く事でしょう。東京行郵便ない夜らしい。

260 5月6日 下落合 大石田（榎本屋）
本年は小生の知っている範囲に於て一番、盛んな梨花。只今にては既に後れておれど、尚趣きは残って味う可く、少しは遺感を慰め得らる。昨日、今日の雨で大分落花してしもうらし。何とか考えざるを得ず。例の大橋は只今、つけかえにて鮮人多勢にて、毎日、騒ぎおれり。仮り橋は少し上手にあり横山村へは却而近道となる。

261 5月8日 下落合 大石田（榎本屋）
南君が今朝来ました。これで少し賑かになりました。大体の処を案内して横山の村長さんの処へも行きました。久し振りに天気になったので一日中描きました。花は林檎が残っていますが、残りのやつを見付けて描きかけました。これで天気が続けばいいと思います。軀はいかがですか。御用心なされ。

262 5月10日 下落合 大石田（榎本屋）
只今野菜を一箱御送りしました。五種類を入れてあります。凡て、うでて喰べるのが一番宜しいのです。アエコと書いてあるのが一番美味いようです。早くお上りにならないと、いけません故、なる丈御近所にお分けなされ。

263 5月13日 下落合 大石田（榎本屋）
天気不順にて困まっています。花は殆んど落ちて青葉ばかり。始めて大石田の青斗りを見ました。天気が順序よくないで捗らず手古摺りました。天気を待つので滞在日数も確定しません。青葉は奇麗ですが、一寸描く気にもなれず。御病氣如何ですか。南君は花がないので気の毒ですが大して落胆していないようです。

264 5月15日 下落合 大石田（榎本屋）
南君は今夜出発します。小生は明朝か、或は明後日の朝出発して赤羽着は多分九時半頃と思います。出発の節は電報をうちますが、お迎えをお頼みます。先は

265【封書】8月18日 仙台市東二番丁21 坂様方 下落合
昭和五年八月十八日 昨日第二回目のハガキ受取りました。こちらの方は変わった事はありません。一昨夜成富さんを送りに東京駅に行きました。そして御元気に出発せらるのを見届けました。且つ御養子の本統に剛強そうな人であるので安心しました。なかなか盛んでした。其婦りに斎藤さんの御一□と一休みしてお分れました。未だ時間が早いので小柴君へ、一寸寄り途しましたが途中縁日であるので白井の家族に会いました（白井だけ留守番）。これも元氣でした。小柴君の処は相変わらずですが、不景氣の話をする様に同君もなっていて、日光行などは中止の様です。此間の木曜日に藤島先方を訪ねて遅く迄遊んでいました。昨日の日曜は銀ぶらの約束を先生としていましたので先生が案内役で夕食を一緒にして後は珍らしい処を見せて頂きました。久し振りでした。これで貴方の予想の訪問の内は廣幡さんだけ残っている事になりました。昨夜と一昨夜は遅くなっていますので今夜は外出せず明日あたり尋ねてみる積りです。夜早く寝る時は夜半目醒めて困る事が屢々ありましたが大した事はありません。東京は朝夕は大変に凄ぎ宜しうなりました。藤島先生は事によると仙台方面に写生旅行に行かれる話でした。多分貴方の滞在中です。それが済んだら関西方面に行く由ですが御老人に似合わぬ元氣な話でした。小生がお伴をすると賑かていいの

ですがお気の毒です。松村君は十九日頃に京都に帰よう云うています。洋服着て街を歩いています、みともないのから笑れましょうに。

266【封書】8月21日 仙台 坂様方 下落合
昭和五年八月二十一日 昨日、鶴沼に突然行きました、金子君の処の世話で夕方迄遊んでいました。江の島廻りをしました。初めなので一寸気持が変っていました（途中二三ヶ所泳いで渡りました）。帰りに鎌倉駅迄見送りして呉れました（同君は一ヶ月斗り前に妻帯しています。金子君には上等の妻君です）。電車から三十間斗りの処に同君の住宅があるので遊びに出るには大変便利です。廣幡さんの方へは一昨夜行きました。大変遅く迄居まして御気の毒でした。当方は今所変わった事はありません。もうそろそろ帰京する時分でしょうが少しは物になりましたか。土産物はいづれ鳥津さん処へは上げましょうが二三軒分余分にあるといいでしょう。時間の都合で迎いに行きましようか。

267 9月15日 下落合 千葉県安房郡千倉町（鈴木や旅館）
この辺りどこに行っても宿には女が沢山居る処らしい。町には飲食店が至る所にある。そして必ず女がいる。着いた斗りではよくは分らないが苦しめられる体迄の野卑さは未だ見ぬ。明日、場所探しをして見た上で滞在の気持ちを定める。今日は北條までは車中に一人か二人でいた所北條のお祭りで一杯になり千倉では沢山降りて自働車は満員。日は暮れるし宿は未だ定まらぬ。一寸非観したなれど、とにかく宿まれるようになった。先は。

268 9月17日 下落合 千倉町（鈴木や旅館）
昨日は近郊一寸歩いた。描く処は少しあるけれど、小生には不向き。ぶらぶら遊んで居るには、よさそうです。ここは要塞の区域からだいい分離れている。御安心下され。昨日は鰐が沢山採れたそうで漁夫連は大喜びなれど町はたいして賑さなし。夜は相変らず困るけれどいたし方なし。蚊帳は未だ釣っています。その換り東京よりは余程暖かそうで、夕方で沢山小供だけは未だ裸でいます。時々は海にはいるらしい。

269 9月19日 下落合 千倉町（鈴木や旅館）
今日は大雨で何にも出来ませんでした。来た日は丁度夕方から小雨。翌日は天気で其の翌日は曇りであったが、少し描けたが其次は雨で、そして今日も雨。この天気は十四日以来の続きらしい。海は暴れていてなかなか宜しいけれど、何処からも描けぬ。町は人口が多いだけに菓子店などは沢山ある。酒場も球突やもある。宿の飯のこわいのは閉口する。昨日知事さん連の巡廻の昼食【数字不明】のおかげでやわ飯らしい。柔さを味うた。その換り朝飯は十一時に持て来た。知事さん等は、よい事と同事に悪い事をも小生に残して往た。

270 9月20日 下落合 千倉町（鈴木や旅館）
描く範囲の簡単な上に風を、よける処を捜すので描く場処は少ないのでここでは、余り描けません。一枚描きかけています故、まともらば、それでお終いにするかもしれません。事によったら他の処に行くかもしれませんが、要件のない限りお手紙を下さらずとも宜しい。両三日の内に定まりましよう。宿の飯が堅いのではぐきを痛めていますが大した事ありません。相客のある時は飯は柔か。今夕は始めて飯らしい飯。感じは普通だが食物の乱暴なるは怖らく横川程ではなし。

1931（昭和6）年

271【官製葉書】1月10日 京都市新町通り三条南 牧田忠一様方 下落合
お出立になってから只今一寸太陽の光を見ているだけでにて其後は降雪が一日続いて、それから雨で鬱陶しい日斗りです。七日は袖木さん処でもゆっくりして藤島先生所へは未だ行かずにいます。□路が悪いので、やりきれぬ。例の袖木君の所の催の相談で一日程つぶれてしまった。三越の方へはお帰り迄に行く残金があったら抱って見ます。多分□□□□かったのだろうと思います。京都の方お変りない様で誠に結構。ゆっくり処用を方づけていらっしゃい。もう事によると神戸の方に廻ってられるかもしれぬと思うけれど、とにかく東京の方は変化なく無事でいる様子だけおしらせをして置きます。お手紙は昨日の夕方前に着いたので其間割合時間がすぎているのに愕く東京はなかなか寒むい。雪解けは明日あたりにならぬとだめ。皆様に宜しく。風邪を引かぬ様なされ。

272 1月24日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
汽車は少しも込み合わず楽に来ました。別段申上げる事はありません。川合さん達四人で賑やかな事です。明日あたり其内の大部分は引き上げるらしい。江藤君は景色に大満足の様です。雪は少し残っています。今日は曇りで雪模様。連中は湊村の方に出かけています。元氣連中のスケートで滑っています。風邪引かぬ様なされ。

273 1月27日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
そろそろ疲れが出てきましたが、多分毎日湯に入っているためでしょうか、【以下数コピー薄くて判読不能】います。今日は実に冷たくて来てから始めて降った昨日晩の雪が残っていますので、【以下数字コピー薄くて判読不能】助かります。昨日江藤だけ帰京しました。今晚残りの人が出立します。おかげで賑かでしたが今夜からは淋しくなります。

274 1月29日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
御便り申し上げたなれど変わった事もなし。天気は毎日描けるだけにはなっていますが刻々変化しているので困まっています。描けない日に何処かへお訪ねしようと思っています。ここでは朝日新聞でない故、保存して置いて下され。変わった事はありませんか。

275 1月31日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
伊奈君の絵は画室□□□隅の一番下の方にあります。天気は宜しく【以下数字コピー薄くて判読不能】積り。雪が少なくなりました。【画室の場所を示す図がある】当地は風邪が流行っています。内は換わりない様子で安心しました。軀に気をつけなされ、堀井さんは来られますか。いつ頃ですか。

276 2月2日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
天候が変で絵がちぐはぐで一寸困まっているが只待つ斗りいればよいのです。昨日は雪で描かずにいました。それで守一君の所に危ツ介になりました。寒むいので沢山着込んで肩がこって気持を悪くしましたが、スポンズリをはずしたら、癒りました。先は。

277 2月3日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
昨日袖木君来訪いたされ賑かに相成り申し候。折り悪しく今日は小生在諏中の雨風にて雪解けいたし景色一変いたし候。袖木君には誠にお気の毒なれどいたし方無く候。今日は描けぬ故、岡谷より上諏訪を案内いたし候。只今片倉の湯の休憩室にて書きおり候。蒸風呂にてへとへとになっています。

278 2月10日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
今朝小柴君が突然やって来た。賑かになった。柚木君も他に行く事をやめにしようと主張しているので、諏訪だけに居る事にした。多分、もう一週間ほど居る事と思います。今日降雪一尺にも及んでこれで帰る迄真白の景色を描く事になります。これから上諏訪に案内しに行きます。

279 2月14日【消印】 下落合 下諏訪（桔梗屋）
堀井さんは未だ見えず候。とうとう帰京の時に相成り申候。多分十六日の朝十時半頃に出発して新宿へは其日の夕方の六時頃かと存じ候。其節又一報いたす可く候。アテネの方の都合で向いに来ても来なくても宜しく候。荷物は都合して自分で持てるだけにして置く積りに候。只今柚木君と小柴君と三人連にて一緒に帰京する事に存じ候。小柴君風邪をひいて三十八度熱をだし申候。一寸心配。本人、口先は元気。明日起れれよいがたと存じ候。明日はスケートの大会。

280 5月9日 下落合 大石田（榎本屋）
汽車は大変込みましたが、連中が要領よく場処取りをして呉れたので大助りでした。今日は寝不足で午後は寝ました。偕て花は雪解け遅れたためか、今迄に見ぬ不出来。梨などは皆目蕾らしいのは見ず今に少しは出て来るだろうと頼み甲斐なく待つ事にしています。折角来た事故、効果だけは得たいものと思っています。頼まれた方には東京に帰ってからでないと出来ないかもしれぬと思っていますが。寒むいことは未だ未だ。雪は町にはないが青草も未だ少ない。

281 5月11日 下落合 大石田（榎本屋）
花少なければ、何処か描けそうですし、此冬は雪は宿の大屋根より高く積み上げたそうです。一体に花も草も色が悪い。呑気さは相変わらず。横山村への橋は付け換えて風景は実に悪くなっている。河向うの杉の森は大ぶん切ってしまった。昨日から描きかけた。先は。おハガキ只今受取る。

282 5月13日 下落合 大石田（榎本屋）
花は少ないが何とか描けそうだ。明日は宿で結婚式がある。多分奇習慣だろうと思っている。人形の衣服は寺崎の奥さんにお願いしたら、先方は喜んで引きうけて下された。随分助かる（興味を持ってられる）。自分も沢山人形を造っていて見せて貰うた。中沢さんは多分来られるらしい。

283 5月15日 下落合 大石田（榎本屋）
昨日は宿の息子の結婚式で大変でした。そして珍らしい光景は千載一寓です。今日は知人の接待で、これも大変です。台所はひっくりかえています。今夜は夜□はないらしい。明日は宿の主人の六十の祝いを続いてやるそうで、とにかく三日間は大賑で、そして其後は、里帰りで、賑やかでしょう。結婚の光景を公然と見せるのとこれを見る人で廊下は人一杯。明日は柚木君来るらしい。

284 5月17日 下落合 大石田（榎本屋）
昨日柚木さん来着。花もそろそろ終りかけているので気の毒ですが呑気な所故、我慢をして貰っています。今日は天気が悪いので山形に行きましたが、商品の陳列所には買う様なものはありませんでした。明日は天気がよくなって欲しいのですが、どうだか。絵は未だ出来上がらない。少し予定より後れるのかもしれぬ。帰りに柚木さんと多分一緒になりましょう。

285 5月22日 下落合 大石田（榎本屋）
多分明夕の五時位当地発の汽車にて帰る積りにしています。翌日

朝五時十分赤羽着と思います。あまり時間が早やすぎますのでお迎はいりません。自分で持てる都合をして行きます。若し変りましたらお報らせします。柚木君と一緒にです。

286【官製葉書】 10月6日 下落合 神戸花隈
こちらは変た事はありません。今度来る時には大腸カタルの□□□を持って来て下さい。帝展への出品は京都へは出品せぬ様にして置いて下さい。お忘れない様願います。実写真の撮影は此際、凡て断っておいて下さい。□□□□なっていますが三七日は例の如く賑かでした。此間は藤井さん処と新井君の所へよりました。

1932（昭和7）年

287【封書】 2月8日 京都市新町通り三条下ル 牧田方 下落合
御音信拝見いたし候。其後予定通りお疲れの様子とは存じ候へ共、たいした事なき由先ず安心いたし候。とにかく少しは元気になって用事を、なさることを薦め申上げ候。こちらは何等変った事もなく皆々無事に御座候。他よりも変った通知も只今の所無く候。亀島様が一寸お訪ね下れ候位に候。松村君昨夜来られ候も小生藤島先生宅への不在中にて未だ余は会わずにおり候。東京の方は一寸あれから寒むく相成り申候へ共例年に比しては問題にならず候。台所の方も何とか、ごまかして二品づつは作りおり候。御安心下度候。寒むい故気を、おつけ□され度候。未だ京都の方においでと存じ候、皆々様に宜しく。

288【封書】 2月18日 神戸市兵庫切戸町宝球寺内 下落合
只今おハガキ拝見【以下数字コピー薄く判読不能】と□宝球寺に御世話になっている様子ですが、内の方へは知らさずにありますか。こちらは変化はありません。御安心を下。二月三日刑部君の方は男子生れて兩人共に健在。十五日が済んだ時分に往てお祝を云うて来ました。大変な喜び方です。小生写生行きは未だ未定にしています。いづれ出掛けねばなるまいと存じますがお頼みしたい事がありますけれどお軀にさわると、面倒故、止めにします。鷺尾さん達に宜しく。おばさんに四月頃のよい時分に来るように云うておきなされ(食糧品沢山、御持参にて) 軀を、お気を付けなされ。

289 3月3日 下落合 下諏訪
汽車は新宿で乗った時と同じ様に、すいて諏訪迄来ました。雪は少し残っていますが、実に汚く残っています。今日富士見の方へ行きました。失敗でした。明日も其方面に行きます。本年は潮水はとうとう結氷せずお御渡りもなかったそうです。先は。

290 3月7日 下落合 下諏訪
熱は降ったか。風邪であれば尚更、起伏が面倒故、やり損うと始末が悪い。都合に依って僕が帰らないと困まると思うが如何。それとも順序よくいておるならばよいと思うが、寢室の方に誰れ、寝て貰うといいが。少しでもよい方ならすぐしらせ。

291 3月8日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
六日出のハガキ拝見いたし候。熱の出るのに予定の様に候えども、小生不在故、何かと不自由と存じ、やり損いがなきやと案じられ候。昨日は多分少しは宜しくなるであろうの電報なれと順調にならねば安心ならず候。当地春景色にて遠山に雪を見るのみ。遠出もしたれどもごついて駄目。新たに始めようと存じおり候。

292 3月9日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
余病の出ぬ様御注意を乞う。出来るだけ、寝て居の方がいいと思う。

今日は珍らしく申し訳けに五分斗り雪降りました。そして見ている内に解けました。多分これがしまいの雪かもしれぬ。そして昨日は一番寒かった（電報見た）

293 3月10日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
大ぶんよくなりそうな通知が来る時分かと思うている。曇たり輝たり描くには誠に都合の悪いように出来ている。昨日の雪は当地はもう跡方もない。梅は未だ咲いていぬ。花は、どこにいてもある大石田辺よりは美しいかもしれぬ。軀を御注意。

294 3月11日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
お手紙拝見。いよいよ、よい方だそうで安心しました。今朝五寸程降雪がありました。暖かいのですぐ解けました。春気分です。今迄にない絵の方は失敗です。他に廻わずに、よい加減にして帰ります。それでも、もう一寸居なければなりません。いづれ又。

295 3月12日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
今日は大雨でとうとう真黒い景色になりました。上諏訪に出掛けました。明日又雨だったら一寸困まる。松本へでも見物に行くかもしれぬ。今日は四月頃の陽気です。軀を御注意。

296 3月13日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
天気有加減で拾六七日頃に帰る予定にしています。もう事件がなければお手紙を下さらなくとも宜しい。汽車は新宿着が五時頃のと七時二十五分頃着のかの、どちらかにします。荷物が、ありますから、むかえを頼みます。いづれ其時にお知らせをします。

297 5月7日 下落合 大石田（榎本屋）
花は今盛り、今朝からの雨風で花が散りはせぬかと心配している。寺崎さんの処は相変わらず。汽車は大変込んでいたが、二等のお蔭で楽だった。今日はこちらは寒むいそうだ。持て来た冬物は皆、身につけた。出発する時笑われたが、笑われたままでのいた方がよかったかもしれぬ。

298 5月8日 下落合 大石田（榎本屋）
今日も雨で花が散るかと心配斗りしています。未だ、場処が定まらないので、気が気でないのです。『少しは元気が出ましたか』寺崎さんの奥さんは中川さんを知っているそうです。

299 5月11日 下落合 大石田（榎本屋）
漸やく天気になりました。これで仕事が捗ればいいのですが。昨日柚木君と三上君が来ました。今夜あたり高橋虎之助君が来ると思います。今年は賑かです。花は未だ大丈夫らしく思います。軀をお気を付けなされ。

300 5月15日【消印】 下落合 大石田（榎本屋）
お手紙二度目拝見。昨日は寺崎氏方にて里帰りのお祝に我々皆でおよばれました。今日は漸やく天気で連中□儲けました。小生は絵がなかなか出来ないので多分小生だけ居残りになるらしい。先は。五月十四日 軀をお気をつけなされ。

301 5月16日 下落合 大石田（榎本屋）
花はすっかり散ってしまいました。明日連中は仙台の方へ行ますが小生だけは後に残ります。もう四五日、ここに居る事にします。十和田湖行きは、やめにします。東京の方は新聞で見ると、大変らしいですが如何。

302【官製葉書】 5月17日 下落合 大石田（榎本屋）
今朝連中仙台方面に向け出発。漸やく、ひっそりいたしました。今朝は寒むく着衣は、だい分重ねましたが午頃から初夏の様になりました。今朝野菜一箱送りました故、近処におわけなされ。斎藤様へも一箱送っておきました。廣幡様の方へは別に送ります（大体はゆでて喰べると宜しい）。大久保君の方へは送っております。

303【封書】 9月18日 下落合 神戸花隈
心配しているであろうと思いつながらも、手紙を書く気にどうしてもなれず、つつい後れて、お気の毒でした。法事の方は、何とか済ませました（誠に経済的に）。十六日はお墓参りでした。例のいやな事は一応藤井、長尾、小林、榎本等に話しました。そして僕の出来る範囲でした方が誰れもいと云う意見でしたので畧め、東京で、定めておいた様にする様にならばいいかと思っています。多分今明日の中に切り出す事になりましょうと思います。いづれなり行きはおしらせをしますが手紙が少なくても心配せずにおいでなされ。「小生着神後、翌日一寸墓参りして芦屋に抱って帰って来ました。非常に疲れていた□□でもあろうか、とうとう二日寝付きまして中の院さんに診察して貰いました。大した事もなしに、もういつもの様にしていますから御安心下され」東京の方は如何。女中の事などで、どんなかと案じていますが変化がないようだとお手紙にも及びません。いづれ又。らく殿 昭和七年九月十八日

304【封書】 9月21日 神戸花隈より
昭和七年九月二十一日夜 頭脳が明瞭でないから、よく判じてお読み下さい。

例の面倒の事に付き経過を申します。小生来神後、軀の区合い悪しく二三日休養して後、時間の都合上藤井さんを訪ね例の話を上上げました所、榎本さんが話すに都合宜しかろうと意見でしたが、小生として凡てを打ちあげ、この位しきゃ出せない話し（それは大略東京で考えていた）をして意見を聞いた節、確とした返事はありませんでした。しかし話を定める節には立ち会うとの話の分れでした。其次に長尾さんに会うて話をしましたら、家だけで、少し金でもあればよいがたと申していられましたが、金が小生の方少しもない話をしましたら、なければ家の方だけで辛棒して貰うのだたと申していられました。其次小林君に会いましたら、長尾さんと大した相異はありませんでしたが、少し金でもやればいいかと申ししていました。同君には小生等の様子を知っています故出来なければしかたないこれどと云う意見でした。そして話をする時には小林君と□□会うてもいいと云うていました。(今小林君脚の病気で寝ていました。大した事なし) 今度は榎本君に会いました。其節小生の方は成るだけお互に後後おだやかにしていたい事と、家の方だけは上げようかと申して置きました。そして榎本君の方で玉置さんの方の意見もあろうから聞いて置くと申して分れました。(東京出発の節は榎本、藤井両氏は小生等の生活に付いて認識不明な事は覚悟故呉々も話し合っています故、金のない事なども呉れも申して置きました) 此等の間に大体先方の考え（玉置さんやら其【「こう」が抜けているか】しょうに当ろうとしている榎本君等の考）も大略分って来ました。(榎本夫婦一度、玉置さんに話□□□てる故、玉置さんを榎本宅に呼んで聞いた事です) 今日榎本氏来られて玉置さんに云うている事を書き付けて見せました。それで見ますと大体先方の様子も想像付かれましょう。大概はその辺であろうと存じて覚悟はしていましたが、今の処は出来る事と出来ない事だけは判然と申して置きました。小生の申し分は未だ少しも申しておりません。それは先方の要求に如何で判る事になるのですから。今の処、大坂の玉置さんの仲間から、とやかたとの意見も大してないとは思いますが、成行きでは分りませぬ。

榎本さんが書き付けて来たものは以下の如きものです。

- 例の家及び土地を玉置さんの名義に変更すること。
- 世帯道具を一通り分与すること。
- 世帯を持つ上に多少予備金を必要とする（是非に出されたし）。
- 衣類父の全部（僕の必要とするものを除いて）頂戴すること。
- 三木さんに頂いた二枚屏風を頂戴いたすこと。
- 奥（離れ座敷）のタンス、（生前頂戴する事になっていると申す）
- 二階のタンス（玉置さんの衣類の入れてある）
- 金の鎖（生前預けあるようなり）
- 金山ツルに立替金八拾円也はこの際、解決されたし
- 仏壇を玉置さんに一生祭れとの事故、祭らせて頂きたし、
- 一番西の借家が立ち退く迄、現在西隣うちの貸家（最近貸家となる）を貸して頂きたき事（但し其家賃は一番西の貸家の家賃を代りに僕等に支払うこと『現住者大滝某が他に引き移った節は直ちにそれに引き移ること』
- 大滝某の住む家屋障子（中すど）それは我々本家の西隣の家に利用してある故、若し先方西の家に引き移る節はそれを頂きたいこと。
- 父の常用の夜具一流を頂きたき事。
- 其他少しづつ現在の家に使用してあるもので玉置さんの携えて来たものを返して頂き事。

以上の事だけ申していたと榎本さんが書き付けて小生に見せました。其内僕に出来る事出来ない事の区別を付けて返事して置きました。いづれ又何とか云う事と思いますが、以上の条件に付き返事をして置いた事を又以下に記します。

- は、しかたあるまい、と返事しました。
- は、これは私の考えにある事と申して置きました。これは種々自分に注文を付けている様です。
- これは、現在に於て小生は（金は）皆無故、いたし方なしと申しました(先方は父の死後、何かで金貳千円也程ある筈故、半分でも欲しいらしいと申していますと榎本君が云うている)これは小生の方は種々の事で無くしていると申しては置きましたが、先方はどうとりますか。榎本君には金を出すなら小生は借錢せなければならぬ事を申しますと、榎本君云わく一時に上げずとも追々にやればよいと云われます故、それも不可能と申して置きました。
- これは小生の考えにあると申して置きました。
- 三木さんに頂いてあるとの屏風は小生、どんなものだか知らず。あらば渡して宜しいと申して置きました。
- これは小生の考えにあると申しておきました。
- これは此前に話を聞いています故、上げますと申して置きました。
- これは話にあった鎖故お渡すと申して置きました。
- これは僕とは関係なき故、関係せぬと申して置きました。
- これは差し上げるわけには行かぬと申しました。
- 現在西の借主は一寸面倒にて立ち退きはなかなかすまい故、其方の家を只今空いている借家に玉置さんが、は入^つってから支払う家賃を其れと差し換えて呉れとの話なれど、玉置さんの世帯が面倒な時にこちらに関係して呉ると面倒でもあり、且つなるだけ、それ等と縁を絶ちたく、他の借家を借りに貰った方が宜しいとの意見を述べて置きましたが。
- これは僅かの事故返して上げると申して置きました。
- これはどんなのか判然と覚えていませんけれど大した事もありません故承知して置きました。
- これは少しずつあるらしいので返す様に云うて置きもしたし、又感じがいや故あらば渡す積りにしています。

以上のことで大概御想像がお付きと思います。衣類道具類は、よい物斗りを望んでいる事を見ると、小生等の困っている事などは眼中になく比格的、贅沢な思をしているらしく見てます。榎本君も、そ

れに共鳴しているや否やは分らずにいますが貴女の云う通りの小生等の此態を少しも想像付かぬらしく思われます。東京を出発する時呉々も注意されていますが、未だ小林君をわずらわす迄とは思いませんが、なるだけ柔かに解決したいと思っています。榎本さんはあまり話が永くなり面倒の様になると大坂に行でも相談して来ると申す様になると却而面倒故、成だけ早く解決した方がよいと云いますけれど、あまり法外な事ならば小生は永くなくてもかまわないと腹をくくっています。（これはいやだけれど）然し、第3、の金の事は多少やってもいいとは思わぬでもないですが、いづれにしても一寸苦しい事故、成るだけ事の少ない方を望んでいます。とにかく縁の切れてま^つう様にするが我々には一番の事故何とかしたいと思っています。

それで話しが永くならば小生は一先ず東京に帰る積りでいます（このままにして）そして貴方と交代して貰うかもしれません。廣幡さんの所に未だあります故都合で取りに行て貰わなければならぬもしれません。

玉置さんの方は誠に簡単に自分だけの事を勝手に思うているのです。小生の方からは、どうしたら宜しいとは一寸も云うていない位です。いづれ別れる事故先方のために、最もよいがなと思う様な事は少しも云わないでいる積りです。（神戸に居る世間体の妾世帯がしていた位の程度らしいです）

別、長尾さんに会うた節、洋行はとにかく今見合わす事でした。それに論ありませぬ故指図ある迄と承知して置きました。明日小曾根さんに会わすとの事でそれに小曾根氏の宅に村上華岳氏と共に行く^と申しておられます故。

明日は御面倒を願う積りにしています。（今日は□□□□□日が思い故、手紙は明日差し出します。御意見あらばお返事を乞う）□□長尾さんが市長と知事を照^つ介すると申していられますが、今県会が始まっている故其内日取を定めると申していられます。小生も会いたいと思っています。

東京の方は如何。□の女中で誠に困りとお察し申しています。此間のお手紙にて中川の姉さんの病気を、小生昨日京都に参り、見て来ました。忠の帰った翌日でした。病人は大変悪いのは一見に分ります。姉さん大変喜こんでいました。あんたでも見たら尚喜ぶ事と思います。庄さんは東京、この手紙が少しえらく書いた様に思うけれどと云うていましたけれど、実際むづかしい様です不明の家引き取る様でしたら、もう駄目な時なんでと申していました。本統にそうに見えます。

東京の方の内が面倒なければお会うてあげたらと思うけれど。意識は確かです。未ださどってられない様です。息子が昼間は付いている故、淋しそうにも見えませぬ。いづれ忠から話を聞いていられる事故、申しませぬ。急に寒むくなりました。軀をお気を付けなされ。先は。分り難くお気の毒。お春等は元気になっています。（玉置さんは話が付けば隣の借家にいつでも行く^と申しているそうです。お互に何でもなくいます。今夜は榎本さん処に宿てます。相談する事でしょう）金山　らく殿

1933（昭和8）年

305　1月24日　下落合　下諏訪（桔梗屋）
　　昨朝無事着。汽車は込まずに、ゆっくり、富士見辺迄寝られました。東京の降雪は当地では関係なし。只今の積雪は十八日に積ったの残りです。河合さんは十七日に帰京したそうです。今日スケートのオリンピック選手が来て種々の型を見せて賑かです。

306　1月26日　下落合　下諏訪（桔梗屋）
　　二十五日出の御手紙拝見。今日は雪降り。小やみの間にスケッチに出掛けましたが今迄にない程の寒さで油が凍って、描き難く失敗をしました

307　1月30日【消印】　下落合　下諏訪（桔梗屋）
　　二十八日出のお手紙拝見。本年は本統に冷えて温泉がなかったら描けたものではありません。昨夜は田舎芝居がありました。入場無料、下足五銭。役者は寒むい故皆襦袢の下に沢山着込んでいるので、どれもこれもお相撲の様でした。

308　2月2日　下落合　下諏訪（桔梗屋）
　　顔の皮が張っていたい。本年は例年より寒むくて湖水は一尺程凍っているそうです。雪は小生来てから二度降りりましたが、もうそろそろ解けぬのではないかと思われます。年越しの日が来ます。明神様に其日はお参りしましょう。

309【事務便箋に飛松氏が書き起こしたもの】　2月5日
「諏訪大観」
雪の都合は本年は宜しいでしたが、仕事が手古摺り斗りでいいのが出来ないで非観。明日はヤッカ漁りを見に行く積りです。十日過ぎに諏訪を出発して何処へ出掛ける積りですが、多分越後路の方かと考えていますが、雪の加減でどうなりますやら。行先定まらぬ故此度はあなたを誘う便が考えつきませぬ。事によると帰京してから両三日何処かへ一緒に行て見ようかとも考えています。昭和八年二月五日　らく殿　金山　長野県下諏訪町桔梗屋

310　2月11日　下落合　下諏訪（桔梗屋）
　　明日高田方面に行く積りです。今年は雪のぐあいが宜しかったに反して仕事が、よく出来なかつたので悲観しています。四五日何処かに滞在して東京に帰る積りです。忠もお留守でお淋しい事と存じます。

311　2月15日【消印】　下落合　高田
　　一昨日当地に参りました。雪は所々屋根の近く迄残っています。なかなか面白い情景があります。だれも彼れもが、転んでいる事が愛興を与えると同時に凡て笑いで終っています。人も風景も転んでいる事が必要に思われます。三四日の内に清水トンネルをぬけて帰ります。今夜おすみさんの家を訪ねて見ます。

312【封書】　3月30日　京都市新町通三条下る　牧田方　下落合
　　昭和八年三月三十日　先達つての正さんから忠への文面では忠の考えの無理からぬ事と思う故一寸弁明して置いてやる。説明なしに一人呑み込んでいると変な考えをするもので、毎晩気を落ち付けさせるのも一寸考えを要します。今は落ち付いて機嫌よくしています。それかして例のカバンを、とうとう買ひよった。小生は大概朝の九時の超特急で行く積り（四日）正さんの方も気を落ち付けられたし。奥方も一人呑み込みして小生の遊ぶ日数をお忘れにならぬ様お願い申す。金山　らく殿

313【官製葉書】　3月31日　京都市新町通三条下ル　牧田方　下落合
　　ナナの鑑札、落ちて分らぬ番号御存じならお知らせを乞う。書いたものは何処にありますか。

314　5月9日　下落合　大石田（榎本屋）
　　本年は梨が花少ないので落胆。ハタ織りはやはりあなたが、来て、教わった方が便利で僕だけでは駄目です。羊毛で織るのも一寸面白

く思います。絵が見込み付いた時分にお知らせをします故、其りでお待ちなされたし。

315　5月10日　下落合　大石田（榎本屋）
　　緬羊の毛は当地方で飼育しているため、只今は切り取り時期故買うのには便利らしい。織る機械はいづれ探して貰らうのですが、寺崎さん処にあるので教わる様にと、只今、すえ付けてあります。一通教えて貰う様頼んで置きました。

316　5月12日　下落合　大石田（榎本屋）
　　昨日、江藤君と川合さんが突然来られました。花が少ないのでお気の毒です。大して永くは居ないらしいです。はた織り機械教授するためらしく納屋に組んで用意してあります。写生の方は未だ、めはなが付きませんが、つき次第おしらせします。

317　5月14日　下落合　大石田
　　絵は例に依り手古摺ているので未だ天気の日五日ほどかかると思う。十七八日頃おいでになれば大概是、よさそうに思う。出来るなら五日位予猶のあるようにしておいでなされ。はたは一通出来上る程度に教わる方が宜しい。寺崎さんでは楽しんでいられる様です。江藤君は明日帰るそうです。野菜は売りに来ないので未だ送れませぬ。【裏のコビーあり】　江藤君が来た時は上野を十一時十〇分の汽車で来たらずいていて、よかつたそうです。

318　9月14日　下落合　千倉町（川尻旅館）
　　只今当地着。とりあえず予定の旅館に荷をおろしました。これから場所探しに出掛ける処です。

319　9月15日　下落合　千倉町（川尻旅館）
　　大して描けそうな場所も見付かりませんが、何とかして描いてみましょう。今日は雨で一寸面白そうでしたが、雨中ではどうにもなりません。明日天気ならいいと思っています。今夜は踊っているのでしょうか。皆様宜しく。

320　9月18日　下落合　千倉町（川尻旅館）
　　本日新聞紙上で森清次氏永眠の広告あり。とりあえずお供えとして金五円也をお送り下されたし。同氏の住所は『東京市麻布区本村町四十三　森清治様』宛にて宜しい。柚木君と相談する宜しいのですが暇がありません故、とりあえず右お願い申します。とりあえず。

321　9月22日　下落合　千倉町（川尻旅館）
　　絵は美事に失敗。明日当地を発ちます。帰途、和田浦と云う三駅先きの処に行て見る積りです。帰宅は二十五日迄にする積りです。太海では松村君に会いました。先は。

322　10月28日　下落合　吉田（刑部旅館）
　　昨晩は山中湖畔のホテルに泊りました。連れでもあらば少しは宜しいのですけれど、林中の一軒屋で淋しくおまけに散歩するには寒むくて駄目。富士は三度目の降雪。大して描く処もなし。今日は吉田に泊まる。明日は近所を歩いて見る。

1934（昭和9）年

323　1月27日　下落合　長野県富士見（油屋）
　　昨夕六時当地着。なかなか寒むい。宿は辛棒出来る程度。今日は隣村に出掛けて行た。雪の量が少ないので描き悪くい。この近房で何か描いて行く積りです。諏訪は二月の初頃に行く積りです。汽車

は込み合わずに来ました。松村君は元気になっています。曇りを描いているようですが天気で困まっているらしい。一人でこんな所には一寸屏古なれど松村君が居るので助かる。腹の調子やや宜し。

324【裏のコピーあり】1月30日 下落合 富士見（油屋）
ここに泊まるのは始めてなれど松村君が居るので、やや落ち付いていられます。寒むい事はお話にならぬ。始めての所故、一寸珍らしい感じがします。出来るなら、ここで描いてから諏訪へ行こうかと思っております、夜分が味気ないので、事によると諏訪から通ってしまうかもしれませぬ。当分はここに居ます。松村君は大変気に入っているようです。隣村迄毎日自働車で通っています。

325 2月1日 下落合 富士見（油屋）
雪が降らないので困まっている。諏訪の方は真黒な事と思う。寒むいのと風が強いのでやりきれぬ。お腹はこたつのお蔭かして其後大した変調もなく、夜は外に出られぬので消化不良を来たさないかと案じているけれどあついおこたでお腹の中で、おかゆになってこなれているらしい。もう暫らくここにいます。諏訪に行く時に知らせます。先は。

326 2月4日 下落合 富士見（油屋）
おハガキ拝見いたしました。磯ヶ谷への額縁の催促は私の方より差し出し置候え共、念のため貴方よりも電話にて今一度催促して置き下され度候。(三十号人体)型は一平さん御存じの筈。若し忘れていたら先達届けて呉れた二十五号のと同じ式にて宜しくと申し下され度候。一昨日降雪にて今日はとても寒むい。【裏のコピーあり】七八日より下諏訪の方に参る積り。今度は下諏訪は一週位の予定。

327 2月7日 下落合 富士見（油屋）
絵は未だ出来ませぬけれど一先、桔梗屋に行って少し通います。松村君は未だここに残っていて出来たら下諏訪に二三日来る事になっています。私は下諏訪に一週間あまり居る積りで、それから高田の方に廻ります。大橋君の処が私のアドレス帳にありませぬ故早速廻送して下さい。お手紙只今拝見。

328 2月9日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
一昨日当地に来ましたが富士見の方のが出来上らないので今暫らく通います。そして少し休養してから高田に参ります。御都合でお出かけなされ。ここには多分十八日頃位迄いましょう。松村君は富士見に残っています。高田の方へは多分、小生と一緒にいましょう。

329 2月13日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
富士見の仕事は今日で切り上げました。松村君は明後日、下スワに來ます。そして多分十八日頃に高田の方に一緒に出かけます。湖水は一尺以上も結水しています。寒むさも今年一層厳しい様です。夜分は疲れているので人形はしませぬ。へとへとで何にもしませぬ。桔梗屋のレコードは踊れません。

330 2月16日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
昨日松村君来る。上諏訪の温泉に入浴。明後日高田に行き多分一週間程の滞在の積り。お出てなさるは御都合にて宜し。諏訪は本年は割合いに雪多くも絵の方は失敗。諏訪の方より絵だけを送ります。

331【封書】2月18日 下落合 高田市本町6丁目（高田館）
昨日当地に参りました。諏訪と異なり氣候悪く、外に出ては写生はまあ不可能らしく思われます。雪は昨年より多い様です。モデ

ルの材料を少し考えて整えられたら整えて行きたいと思います。松村は都合、今夕帰京しますが、小生は後五日居居ねばなるまいと存じます。懐中誠に不都合になり一寸不安を感じかけましたので早速ながら『参拾円程至急に送付を願います』若し小生の帰る間際時分に雪見だけに来られれば如何と思いますけれど宿のぐあい、お風呂が温水でないので軀を休める気分にはなり悪くかろうと思います。今度はお止めになる由、こちらもあきらめています。もう一週間程の内に帰京出来ると思います。今年は疲れているので無理をせぬ思にしています。松村君の友人が居るので何とか世話して呉れる様で助かりそうです。今日は吹雪で天気の見本の様です。街の雪大抵は屋根以上になっています。気温は諏訪よりも楽しいですが風がひどいので却而寒むさを感じます。先は 昭和九年二月十八日 金山らく殿 松村に託す

332 2月22日 下落合 高田市（高田館）
昨日 50yen 為替確かに受け取りました。これで、やや安心。吹雪やら、雨まじりで今日はとても寒むい。外ではとても描けそうもなし。天気を待って仕事するより外なし。一枚描くのには僅かの仕事が時自非常に要して捗らぬ。松村君居なくなって淋しい。もう少しの辛棒。

333 2月24日 下落合 高田市（高田館）
多分二十七日の朝八時半ので当地発。赤羽へ六時半頃着の列車にて帰京いたします。変更すればお知らせをしますけれど、其ままですと、其積りにて赤羽迄誰れか出向えを頼みます。毎日吹雪にて仕事出来ませぬ故、よい加減に見切りをつけます。先は。

334【封書】3月17日（京都新町通り三条下ル 牧田方→神戸花隈へ転送）下落合
例に依り御着になった通知なし。多分安着と存じ候。留守中は変わったことなし。富崎氏の温心会は三月三十一日に変更した由同氏より通知あり候故、切符配付いたし候方方の所へはお知らせいたし置き候。おチカ様の所は染井九七〇番地にして差し出しおき候。温心会が延びた理由は御滞在の日数とは関係無く候やと存じ候。斎藤さんの奥様貴方に用事あり電話かかる、小生では駄目。孝夫さんのマリヤーージュの事。話の相談あり。水道や未だ来らず。おらく殿 金山

335【宛先、差出場所、日時不明（コピーなし）】
十六日出のおハガキ拝見。私の手紙と入れ異いに候、昨日小曾根様より例のもの御送付に相成り候。処置はあなたが帰京する迄保覚いたし置き可く候。同氏の所は下記の所なれば鷲尾さんへの途中一寸御礼に立豫られたく、忘れず届いて宜しいかと存じ候。『兵庫区湊町一丁目』こちらは変った事なし。黒瀬さんの稽古は未だなし。先日の藤島先生の集り後二十人あまりフロリダに参り大概是踊っていたれど小生は相変わらず例の通り。

此ハガキを書いてる時に黒瀬さん来る。忠を迎いにやった

336 5月12日 下落合 大石田（榎本屋）
汽車の中は理想通り一椅子に一人。但し小生の箱だけ。花はこれからで丁度宜しいのですが雪の加減で若草が少なく何となしに淋しく見えます。寺崎さんの奥様は只今、婿先先のうすめさんの眼病看護で、郡山に行っています。寺崎さん処は淋しくあります。昨日、今日は場所探しをしました。今日から描き始めました。一寸疲れたのでハガキが後れました。次便に要領よく書きます。

337 5月14日 下落合 大石田（榎本屋）
梨は今盛りなれど昨日からの雨で心配でならぬ。川は一尺以上も増水して大変な変わり方をしている。寺崎さんの奥さんは小生の滞在

中には帰って来られまい。女中の事を寺崎さんに聞いたがよいのがないそうだ。以前に二人程世話して失敗したそうだ。今まじめなのが少ないそうだ。まあ、駄目と思わなければなるまい。奥様さんがいずとも、出来なら来られる様に順備して置いた方がよい。絵は未だ一日しきゃ描いていぬ。花は今盛りで美しい。紅梅が未だ残っている。

338【封書】5月16日 下落合 大石田（榎本屋）
不敬御返事いたします。文部省の手当は画家の収入の内計算したと御返事しあった由、それにて宜しいと思います。家賃の方はどの位になっているか見当つきませぬけれど諸雑費を差し引いたら大した事にはなるまいと思いますけれど若し大略見当付けば宜しいけれど、支出と収入が半分半分位と思います故、其由申し出られたら宜しいのではないかと存じます。書き加えるにしても税務省の今迄のやり口では面白くありません。下女の事は寺崎氏より物色して呉れているらしく、目下自分所（寺崎宅）に居る子守の姉さん（二十才）を聞いて見ると云うていられた。(本人の話)其内一度見たら如何との話でした。あてはなりませんけれど話があったら会うて見ます。今日始めて天気で漸やくゆっくり描きました。花は今日あたり絶頂です。天気を心配しています。松村君が来たい様子です。事よったら何か聞きにいかもかもしれませぬ。花は後々何かありますけれど散るのも早いでしょう。二十日過ぎ位においてになっては如何。絵は二十三日位迄かかりましょう（天気宜しくば）。やはりこちらは呑気位気晴しの積りでいらっしゃい。軀を御注意。返事は容量悪いかもしれませぬがこんな事しきゃ書けぬ。昭和九年五月十六日 金山 らく殿
山形県大石田町 榎本や 金山平三 昭和九年五月十六日
書き方わかりませぬ故あなたから書きつけて送っておいて下され。(あなたが税務省に返事しておいた通りで宜しいと思います)

339 5月18日 下落合 大石田（榎本屋）
寺崎氏方の子守の姉、女中駄目、母親不承知。他に探して見ると云われるがしかし駄目らしい。花はそろそろ色が変りかけた。気が急けてならぬ。昨日は努力した割に手古摺った。今日これから出かける処です。河の水は大変減って旧の様になり気がかりはなくなりました。

340【封書】5月19日 下落合 大石田（榎本屋）
御手紙拝見いたしました。高橋さんの請求書は先づあんなものであらまと思います。後金百円也位で済むと思うていたのは、水道口のシッキイと、井戸端及び通り庭のシッキイを勘定していなかった故でした。書き付けは送り返します故、手元が都合宜しかったら払って置いて下され。都合にて私が帰京してからでも宜しいのですが職人の事故月末少し前に金がいいる方が宜しいのであらうと存じます。花はもう青い葉と変りました。描きかけが未だ四日位かかる見込みです。林檎の花が咲きかけて奇麗です。十二号を一枚明日からやり始めようかと思っています。天気が続く事を祈っています。天気が宜しかったら二十四日には絵は止めても宜しいのです。二三日ぶらぶらして帰京しても宜しいのです故、来られれば其積りにしておいでなされたし。おすみさんの方はもう少し延ばして貰うわけには行かないかしらん。若し貴方がこちらに来てそして帰京早々帰えすのはあまり急わしい感じがします。寺崎氏宅は女主人が不在故何とはなしに淋しいですが例に依りて種々と御世話になっています。松村君が来る様に云うていましたがもうおそい様に思われます。安宅君は十和田に行っています。なかなか美しいらしい音信でした。あなたが来たらお供をしても宜しいけれど。野菜は本年は後れて未だ珍らしいのが出ませぬ。先は。

昭和九年五月十九日 金山 らく殿
山形県大石田町榎本や 金山平三 昭和九年五月十九日夜

341 5月22日 下落合 大石田（榎本屋）
昨夜寺崎奥さんお帰りになった。あなたの手紙は今日見ました故着物の事は次にお会いした時にお頼みして置きます。若しあなたが来ない様だと思うて、今日金三十円也送付方を電報で申しました。もう青葉斗りなれどどこも美しいです。雨で四日は無駄をしました。雨を理用して、一日は尾花沢の近傍と又、新庄に出かけました。人形使いのおぢいさんを見付けて一日、見せて貰いました。新庄では作る内がありましたので試みに頼んでおきました。清原君と他に二人、来ました。花がないのでお気の毒です。先は 二十七日頃には帰れる思いますが先二三日天気でなければ困ります。

342 5月25日 下落合 大石田（榎本屋）
小切手受取り申候。今年は絵は天候の加減か注意した割に追っかけられた様で、失敗です。清原君は未だいます。今度は多分何処へも廻らずいつもの様に直通で東京に帰る積りですが判然とはしませぬ。若し直通に帰る様ならば二十七日の朝こちらを九時十分に出して赤羽に夕方の九時頃に着きます。迎いに誰れか来て下され。いづれにしても電報は打ちます。若し予定が変れば知らせます。十和田へは行きませぬ。

343【封書】8月20日【宛先不明、仙台か】下落合 金山平三 昭和九年八月二十日夜書く
御手紙二度頂きました。小生は多分明日房総の方へ出発する事になりましょう。和田浦の金子屋と云う旅館に行く積りですが込んで部屋がなかったら他にしますが、内の方は変った事ありません。昨日寺崎さんから大変不幸まが知らせがありましたので愕きました。手紙の様子では奥様が先月の二十二日に烏森にて御逝去になられたのです。只今又あなた宛に手紙がありましたので同符してお送りします。あまり意外なので何とも申しようはありません。早速お線香を送りして置きました。いづれ房総に行てからお悔みの手紙を書きますがあなたよりもお悔み申し上げて置いて下され。荷物を漸やく今こしらえて、此手紙を書く処です。これから湯に入って寝ます。信夫さんの電気蓄音機は欲しいけれど金百七十円は只今の小生には一寸えらい。絵で交換して呉れれば信夫さんだといいいけれど（但し感じと、デコレーションはいいのかな）富崎さんビーチだと少し話せるらしい。案外な見方があるものと愕かされる。東京は少し涼しくなって来た。多分仙台もそのようであらうと思う。いづれ旅行先より通知いたします。先は。

344 8月22日 仙台 坂様方 和田浦（金子屋）
昨日当地に参りました。避暑客はもういません。淋しい事です。描こうと思っている処は案外につまらなく見えます。少し落ち付いたらいいかもしれませぬ。今日水につかりました。温かい水でよかった。あんた向きのプールがありますが、はいる人は僅かです。その水はぬるくて風邪ひかいで宜しい。蓄音機の話はどうなりました。【裏のコピーあり】

345 8月28日 仙台 坂様方 和田浦（金子屋）
幸に天気続きで描く方には好都合でしたが、例に依り手古摺って壹枚フィに致しました。天気の都合で三十一日頃、波太に行く予定です。そこには滞在日数は定りませぬ。仕事の都合で他に移るかもしれませぬ。其内お知らせをします。黒瀬さんは忙わしいので止めにしたそうです。来月の二日は灯火管制でダンスは出来ないでしょう。今の内に延期の通知をして置くといいと思います。

〔表面〕蓄音機はヨク、思い切って買う事にしましたね。林先生には相済まぬ事ですすが信夫さんに宜しく。

346 8月31日 下落合 安房太海（江澤館）
　　今日、ここに来ました。大概は描き尽しているので描く気にはなれませんが、二三日してから確定のお通らせをします。駄目なら荷物都合で一度帰京して他に出直すかもしれません、それも未定。今日二十九日出のおハガキ落手。

347 9月3日 下落合 安房太海（江澤館）
　　一日の大暴風から毎日悪い天気続きです。八日か、九日には一先、帰京いたす積りです。若し来られるならば、それ迄にお出でなされても宜しい。小生都合にて帰京後三四日の予定で他の方面に出掛け度くとも考えています。其時にでも一緒に、行けるなら参りましょう。小生ここに来ました節は知人の画家がいましたが翌日帰京。只今宮仲の吉田と云う美校の生徒が来ました。『当人の母、宅に来る』

348 9月7日 下落合 安房太海（江澤館）
　　明後日九日午后二時五分に両国に着く予定です。このハガキがうちに着く迄に帰ってしまうかも分りませんが。若し暇があったら両国に来て下され。東京からの通信は二日かかります。先は。

349 11月7日 下落合 軽井沢（つるや）
　　軽井沢に着くと急に寒くなる。宿もうこたつ。冬枯れの様でどこも穢なく見える明日は描く処を探す積りだが、いい処が見付けられればいいがと思う。麓や妙義の辺は紅葉で美しかった（羨やましい）宿は僕一人。夜は賑やかな事であろうと察する。

350 11月9日 下落合 軽井沢（つるや）
　　昨日は折角晴天になっているけれど風が強くて困まった。何処へ行ても冬枯れで穢なくて駄目。今日は熊の平迄下りて見たが、もうこの辺も遅い。横川迄下る勇力はなし。引き返えて追分来ても、高原の面白さはなくただ淋しい斗り。沓掛迄歩いてる内に雪がちらついて来たので汽車で沓掛から帰って来た。この調子では何にも描けそうもなし。まあ淋しい一人見物の気で探し廻わっている。草津は昨日降雪したそうだ。明日天気の違いいで草津に行くかもしれぬ。

351 11月12日 下落合 軽井沢（つるや）
　　今日は草津見物に行く途中面白い処が沢山あれど茅里の間人家なき所で乗り合自動車に捨てられたらそれ迄。草津は雪の草津でした。連れと一緒に居れば二三日はいい処らしい。絵はちっとも出来ない。明後日の夕方六時半に赤羽に着く予定にしているけど当中ならない中荷物は何んとかする故迎いなして宜しい。

1935（昭和10）年

352 2月2日 下落合 富士見（油屋）
　　本年は雪は極少にて興味起らず当分降雪を待つ積りです。インパネスは今朝、食事の時に参りました。安心いたしました。今日はだいたい分歩き廻りました。松村君は遠出しています。【裏のコピーあり】

353 2月4日 下落合 富士見（油屋）
　　昨日は二三寸積りました。漸やく白い物が見られて安心いたしました。外套が丁度まに合うて助かりました。降雪の分量で大きな物は未だ手に付けずにいます。着いた翌日は大分歩きました。昨日も遠出をしました。今日からそろそろ小さな物を描き始めました。松

村君は大作をしています。元気です。

354 2月7日 下落合 富士見（油屋）
　　一昨日の暴風は家が飛びそうでした。昨日は飛ばされそうにして描いていましたが凍傷を起しそうな寒むさでした。絵のはかどらぬ事お話にならず。描いたり消したりしています。十日か十一日頃には、とにかく一たん下諏訪に行く積りにしています。多分松村も同伴と思います。

355 2月12日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
　　今日、下諏訪に来ました富士見は雪でしたがここは降ってはいませぬ。そして一昨日の雨で真黒になっています。松村君は未だ二三日富士見に残っているそうです。明日は何処か描く所を探しに行く積りですが、ここでは大したもの描けまいと思います。

356 2月15日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
　　一昨日伊原君来諏いたされ昨夜は松村君、富士見より来着。雪がないので何だか申しわけがない様に思われます。多分描く処が見付からないので困っている事と思われます。長野方面も黒いそうです。只今賑か故、当分は気まぎれいたします。

357 2月20日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
　　毎日天気続きで誠に結構ですがだんだんと黒くなって行く斗りです。雪景色は睦きらめました。ここには未だ一週間程居ねばなりませんまい。それから越後行きですから来月の一日には帰京は判然とませぬ。信夫さんの方へは七八日頃に来て頂ければ都合が付こうと思います。左様御返事を差し上げて置いて下され。雪を見ない（描かない）と何となしに変んな気になります。伊原君は兩三日に帰京しましょう。松村君の方はここで描くだけで帰京するそうですが伊原君よりは少し後れるでしょう。

358 2月24日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
　　湖水には氷は、どこもなくなりました。一昨夜の雪で黒い山が白くなってしまって、解けるのを待っています。それでここを、いつ出発出来る事やら見当がつかなくなりました。越後の方へは一寸通るだけになるらしいです。伊原君は一昨夜夜行で帰京しました。松村君は未だいます。寒むいので電線の雪が未だ落ちませぬ。

359 3月1日 下落合 下諏訪（桔梗屋）
　　来る四日の午后六時十分位に新宿に着く汽車で帰ります。今年程働いて失敗した時はありません。いつも繰り返し経験はしましたけれど仕事がうまく行かないで疲れは申しわけがないけれど致し方なし。新宿迄迎いに来て下され。【裏のコピーあり】

360 5月8日 下落合 大石田（榎本屋）
　　前略、道中恙なく当地に着いたしました。直ぐに寺崎氏宅を訪ねました。皆様は無事でしたが、あまり変わり方で只今一寸書きづらくあります。いづれは帰宅の節に委しく申し上げます。他の家はそろそろ建ちかけておりますが寺崎氏の方遠慮して一番後から復興する様申していられました。なかなか皆様元気ですから心配する様の事はなさそうです。今度の奥様はなかなか、よさそうな方です。花はこの慘憺たる光景には遠慮なく本年は大変な花盛りです。花は今年早く梨は今真盛りです。不放棄。

361【封書】 5月10日 下落合 大石田（榎本屋）
　　本年は木の芽未だよく出ず、初物の積りにてとりあえずお送りし

ます 宜しき様に御処置□されたし。出発迄に、もう一度送ります。五月十日 大石田町 金山 らく殿

362 5月10日 下落合 大石田（榎本屋）
　　九日出の御手紙拝見仕り候。新潟の方へは早速返事差し出し置き候。本年は花は早咲きで誠に忙わしき気持ちいたしおり候。其上雨で気が気でなく候。寺崎様の方は何とか心配ない様に処置いたしおられ候、やはり年効と村の長をしておられたお陰かと存じ候。人望と、同情は此際よく相分り申候。本日野菜のありあわせの都合一寸送って置き候。

363 5月12日 下落合 大石田（榎本屋）
　　伊原君よりの手紙符入。本日受取りました。此度は天候に恵まれず絵は捗りませぬ。来てから天気の良い日は二日だけです。風か雨で外には出られませぬ。ここの滞在は予定よりは少し延びそうです。花はよく咲いていますが散りそうで心配です。今日は寒むくて困りました。若し明日天気が悪いと少し遠出して見ます。

364 5月14日 下落合 大石田（榎本屋）
　　昨日も今日も雨。昨日は寺崎氏に連れられて銀山温泉に一日参りました。途中、面白そうな処が沢山ありました。今日は尾花沢から知人に案内されて昨年見た、人形使の家に行きました。人形の首をわけて貰って来ました。途中は薄曇りに晴れましたが大石田に帰って来てから雨になりました。本年は天気運が悪そうです。

365 5月16日 下落合 大石田（榎本屋）
　　本日漸やく六日目に天気になりました。仕事は大変後れて未だ二三日はかかると思います。都合よく行って二十日頃に東北の方に行けます。山は初夏の青さになりました。林檎が今盛んです。寺崎さん処は都合よく近所の大きな家を買求められて、盆にはそこで出来ると云うていられました。野菜は珍らしいのがそろそろ出初めました。其内に送ります。

366 5月18日 下落合 大石田（榎本屋）
　　先程志げ子さん御逝去の由の御手紙を拝見しました。意外で何とも申し様ありませぬ。一寸神戸迄行ておいた方が、よかったかと思いますが私の方からは、とりあえず電報でお悔みを申して置きました。香奠はお考え通りにしておかれても宜しいのですが御都合で私の帰京の時に相談しても宜しい。今日も雨でホトホト困りぬきました。山□は初夏の色をしております。絵は思い切って打ち切りました。明後日秋田に行き其翌日、十和田の方に行く予定にしています。野菜は今朝沢山送りました。今が出盛りです。近所へお分けなされ。

367 5月19日 下落合 大石田（榎本屋）
　　いよいよ明日ここを出発いたします。汽車の都合で、直接青森迄参ります。多分二日程は青森におる事になりましょう。そして十和田を見物してから秋田を見て帰京する事にしました。懐の関係で帰京の時は申し兼ねます。いづれ、後から、追々と通知します。今日は漸やく天気になりましたが只今は曇っています。青森の宿は陸奥館本館の予定

368 5月21日 下落合 青森（陸奥館）
　　十和田湖への道は只今不便にて秋田の方よりしては乗物の道路悪しくて小生の思っている薦へは一寸面倒らしく青森の方からは省営バス。今日一日たてなければ通せぬ由、尚お昨日十和田より帰客の談によれば桜は盛りなれど木の芽は未だ少なく冬景色の空にて青森の方の道路は八甲田山横通過の節は三尺くらいある由なれば折角こ

こ迄来たなれど今年は思い切って、引き上げる事にいたしました。本年聯隊を訪ねて元気な一郎さんに会うて来ました。

369 5月21日 下落合 青森（陸奥館本店）
　　明日秋田に一泊の予定にて其翌日二十三日の朝八時三十分秋田発上野へは晩の八時半着の汽車に乗る積りです。赤羽は八時十六分位と思います。迎いに誰れかよこして下さい。道順が変更しますと知らせますが多分、其様になりましょう。（越後廻りの汽車故、よさそうだったら途中下車するかもしれませんが）本日青森の郷土人形送らせました。多分二箱でしょう。青森は平凡な処です。

370 5月26日 下落合 三里塚（奈美喜旅館）
　　奇麗ですが何処も掃除されてあるようで単調で淋しい風景です。描けるかは未定なれど天気が続けば何とか成るだろうと思っています。何処に行くにも遠いので一寸ヘイコウ。ヘイコウなのは蚊帳を釣って寝なければならむ。宿は自動車の乗場の近く。随分お粗末なれど辛棒せねばなるまい。来る時の電車は大勢だったが小生は写生用の三脚を出したので救かった。

371 8月12日 下落合 神戸花隈
　　十日無事着神いたしました。予定の通り其日は過ごし翌十一日は山崎さんと鷺尾さんとを訪ねました。いづれも、まあ元氣の様です。淡路の様子はわかりませぬが塩田村の方を頼んで置きました。志筑と洲本の間だそうです。伊原君から只今手紙が来ました。出来るなら早々に見物して来たいと思っています。大降雨で大変な暴れ方ですが此前と同様ヒドイ様です。京阪間の省線がだん分壊れている様です。あなたの来る時分には面倒ないでしょう。

372 9月16日 下落合 千葉県夷隅郡興津町鶴原（鶴原館）
　　天気の流れが悪くて困っていますが何とか描いています。二十一日には多分帰京出来ると思います。午後六時頃の内に着くと思います。遅くても聴きに行く積り故、切符は久江に託しておいて下さらば後から行きます。若し仕事の都合で行けなかったらお知らせします。郵便は非常に不便の所です。昨夜勝浦へ祭を見に行きまして足を踏まれて来ました。

373 10月31日 下落合 箱根姥子（西村秀明館）
　　一寸変わった所です。小田原下車して三度も自動車を乗り換えたけれど連絡していて苦労はありませんだ。仲間が居るので淋しくはありません。電灯が来ているので助かります。温泉は温るいですが岩風呂で一寸宜しい。宿やが一件きりの所で夜の散歩が出来ないのが困りものです。

374 11月3日 下落合 箱根姥子（西村秀明館）
　　富士は雪の冠をかむっています。宿は気楽で宜しいが昼間は大変なお客です。景色は変っていて一寸面白い所ですが相変わらず手古摺っています。（大久保さんも同様）紅葉は、これからです。自動車は便利よく出来ています。そして、ここ迄は歩かずに新宿から来られます。湯は温くて風邪ひきそうなれど、わかし湯があって助かります。

375 11月7日 下落合 箱根姥子（西村秀明館）
　　漸やく今日晴れました。絵の手順が悪るなりましたので、一兩日帰京を延ばす事になると思います。十日には是非帰りますが、八日九日の夕方の六時迄に帰らなければ其翌の日だと御承知ください。昨夜、伊原君来ました。やや賑かになりました。今日は雨の翌日で黒く、凡てが見えます。

376 11月8日 下落合 箱根姥子（西村秀明館）

小生 十日に帰る様になれば其夜は二部会の総会があります故出席せねばなるまいと存じます。夕飯は順備せずとも宜しい。

DEHARA Hitoshi

My research is concerned with how the atomic bombing of Hiroshima was dealt with in art. The main focus is on the genre of painting, but also includes drawings, and illustrations, with some sections on monuments. The period under examination stretches from 1945, the year the bomb was dropped, to 1954, which marked the dawning of a new awareness spurred by the *Daigo Fukuryū Maru* (S.S. Lucky Dragon 5) incident. Contained within this span is 1952, the year Japan gained its independence from the Allied Occupational administration - a historic turning point that also exerted an influence on artistic expression.

Artistic expressions related to the bombing are most apparent in landscape paintings; for example, works that depict ruins such as the Hiroshima Prefectural Industrial Promotion Hall. Ruins, including depictions of post-earthquake landscapes, were a familiar motif to painters at a time when people were being subjected to American air raids. Moreover, because the mushroom cloud did not directly depict the devastating incident, it was not regulated by U.S. military censors and came to be used as a symbol of the atomic bomb. On the other hand, though there were only a small number of paintings that depicted bomb victims, due to censorship and other reasons, I was able to find several examples. The best example of a work that focuses on the victims is *Ghost*, the first section of *Hiroshima Panel* by the married couple Maruki Iri and Toshi. In this paper, I analyze this early work in the series, outline special features of the painting, search for links with victims' actual experiences, and shed light on historical changes. I also compare the work to bombing victim and painter Fukui Yoshiro's *Record of the Atomic Bomb* series.

□ Utsubo Gallery: Interview with Sakurai Hiroko

EGAMI Yuka

Continuing on from the last issue of the museum's bulletin (No. 9, March 31, 2015), I am publishing an interview with Sakurai Hiroko, the director of Utsubo Gallery, as part of a series of interviews, conducted in fiscal 2013, with those associated with Kansai-area galleries.

Utsubo Gallery opened in Osaka's Utsubo Hommachi district at the end of the '70s, which saw a sudden surge in the number of contemporary art galleries in Kansai, and remained open until the mid-'80s. The gallery began as a so-called "rental gallery," which hosted both events organized by private people and those planned by the gallery. Gradually, however, Sakurai made a strong effort to undertake activities that would create a point of contact between society and art by, among other things, providing works for architectural spaces. Through my interview, I learned that though the gallery only lasted for a short period, Sakurai engaged in a variety of challenging activities. She attributed much of this to her free and straightforward motivations and ideas as an amateur without a gallery background. Her vivid stories, expressing her feelings as someone who was directly involved in the gallery scene, conveyed the situation surrounding contemporary art in Kansai during the period.

Based on a word-for-word transcript made by Ose Tomomi, who at the time (2013) was a student in the Faculty of Intercultural Studies at Kobe University, the manuscript was revised and edited by the writer before being approved by Sakurai herself.

□ Kanayama Heizo's Letters to His Wife Raku (1)

NISHIDA Kiriko and SAGARA Shusaku

We surveyed the extant copies of letters that were sent by the artist Kanayama Heizo (1883-1964) to his wife Raku (1888-1977).

Raku saved the letters she received from her husband after the two first met in April 1917. Following Heizo's death, she provided them to Kanayama's biographer, Tobimatsu Minoru. After making copies of the actual letters, the writer apparently sent them back to Raku. The copies were also used to create a chronology for a book on Kanayama's work that was prepared in tandem with the biography.

As the majority of the letters were sent from places that Kanayama had gone to sketch, they not only tell us where he was at a given point in time, but also provide information about the inquiries he made and the sort of landscapes he searched for in each location, and the kind of travel itinerary he made as a result. We can also ascertain various things about the couple's daily life including their economic circumstances.

To be more precise, the letters we examined in this phase of our research, dating from 1935, shed light on Kanayama's activities during the year that he spent as a board member and judge for the Teiten (Imperial Art Academy Exhibition). They also tell us that the artist was searching for new sketching destinations at a time when he was primarily focused on Shimosuwa, Nagano Prefecture, which he visited in a bitterly cold season, and Oishida, Yamagata Prefecture, where the snow was melting and the flowers were beginning to bloom.

本号刊行までの経緯

2015年5月、兵庫県立美術館の学芸員15名と横尾忠則現代美術館の学芸員3名が平成27年度の各自の調査研究テーマを提出した。同年8月26日、18名の学芸員による調査報告会を開催。各調査研究テーマにもとづき、学芸員3名が口頭発表、その他の学芸員15名が報告書を提出した。各報告のタイトルは以下のとおり。

鈴木慈子 「具体の作家・吉田稔郎（1928～1997）」
林 優 「横尾忠則の「幻花」挿絵について」
横田直子 「創作版画誌『白と黒』にみる谷中安規の版画作品について」
(以上、口頭発表)

相澤邦彦 「鈴木清一《初秋の丘》の洗浄作業について」
飯尾由貴子 「富岡鉄斎をめぐる言説について」
江上ゆか 「戦後関西の画廊に関する調査（鞆ギャラリー、ギャルリーキタノサーカス）」
小野尚子 「チェコ人芸術家たちの岐路—ミュシャとクプカ展（1936年、パリ）について」
岡本弘毅 「谷中安規の1930年代の木版画について」
河田亜也子 「平成28（2016）年度「美術の中のかたち—手で見る造形」展のプランをめぐって」
小林 公 「安井仲治ネガに基づく福島辰夫コンタクトアルバムについて」
相良周作 「【共同研究】金山平三の金山らく宛て書簡について（書き起こし）」*西田学芸員との共同研究
出原 均 「記録と表現再論」
西田桐子 「【共同研究】金山平三の金山らく宛て書簡について（書き起こし）」*相良学芸員との共同研究
橋本こずえ 「美術館における共催展の変遷」
速水 豊 「福沢一郎の「超現実主義と日本的なもの」について」
遊免寛子 「兵庫県立美術館の教育普及活動について」
平林 恵 「横尾忠則のY字路について」
山本淳夫 「横尾忠則年表 詳細版の作成について」
(以上、報告書提出)

各口頭発表の後に質疑応答を行った。また、報告書は学芸員全員に回覧され、各学芸員が意見を記入した。9月16日に編集担当と学芸関連部門の課長で打合せを行い、他の学芸員の意見も考慮しつつ紀要執筆者を決定、紀要執筆者3名は翌1月末までに原稿を執筆した。その他の調査研究も続行され、本研究紀要や他の刊行物への掲載をはじめ、所蔵品データの蓄積、展覧会や関連行事において成果が公表される予定である。

兵庫県立美術館研究紀要
第10号

2016年3月29日発行

編集・発行 兵庫県立美術館
651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-1-1
電話 078-262-0901

翻訳 クリストファー・ステイヴンズ
表紙デザイン 高岡健太郎(株式会社エヌ・シー・ピー)
印刷 株式会社 メディックス

27 教① 1-027A4

Bulletin of the Hyogo Prefectural Museum of Art
No.10

March 29, 2016

Edited and published by: Hyogo Prefectural Museum of Art
1-1-1 Wakinohamakaigan-dori, Chuo-ku, Kobe 651-0073 Japan
TEL 078-262-0901

Translation: Christopher Stephens
Cover design: Takaoka Kentaro(NCP Co., Ltd)
Printed by: MEDIX, Inc.

©2016 Hyogo Prefectural Museum of Art

